

総社市埋蔵文化財調査年報 15

(平成16年度)

2006年3月

総社市教育委員会

序

総社市は、肥沃な平野と温暖な気候、高梁川の豊富な水に恵まれています。こうした自然条件によって、縄文時代後期以降、沖積平野の開発が進み、稲作や製鉄を中心とした豊かな生産力により弥生時代以降、古代吉備の中核地として栄えています。現在、吉備路風土記の丘・県立自然公園周辺には、国指定史跡作山古墳・備中国分寺・備中国分尼寺・鬼ノ城をはじめとして数多くの遺跡が知られています。これらの遺跡は、過去の歴史を知ることが出来るだけでなく、これからの未来を見通すための唯一の指標となるものです。

総社市は、2004年に市制施行50周年を迎え、2005年3月22日の大合併によって、人口67,733人の新総社市が誕生しました。1954年3月31日の市制発足当時36,968人であった人口は、岡山・倉敷両市のベッドタウン、また内陸工業都市として発展し、この半世紀で概ね倍増しています。

こうした発展のなか、市域・道路網の整備とそれに付随する開発によって、市民生活はますます便利になってきています。また長引く景気の低迷にもかかわらず、店舗・共同住宅・個人住宅建設等の小規模開発もいまだ多く、市街地はますます発展しています。しかしながらその反面、数多くの遺跡が消滅してきており、文化財の保護・保存が大きな課題となっています。やむをえず記録保存の措置を講じた遺跡についても、なかなか報告書として刊行するに至らないのが、現状であります。このような現状のなかで、少しでも早く事業概要・発掘調査成果を公開することを目的にして年報を刊行しはじめ、今回がその15冊目になります。今後の開発に対する、保護・保存の協議が進むことへの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、当市教育委員会の文化財保護行政に御指導、御協力いただいた関係機関、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

2006年3月31日

総社市教育委員会

教育長 栗田 交三

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が、2005年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会・確認調査の概要をまとめたものである。
2. 本書は、各調査の担当者である谷山雅彦、平井典子、武田恭彰、前角和夫、高橋進一、松尾洋平が執筆し、それを編集したものである。それぞれの文末に執筆者名を記し、文責とする。全体の編集は高橋が行った。
3. 遺物整理及び資料の整理にあたっては、近藤雅子・田中富子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は海拔高であり、遺構図の方位は国土座標が記されたもの以外は磁北である。
5. 本書に使用した地形図は、特記したもの以外は総社市発行のものを複製して使用している。
6. 本書に関する実測図、写真、遺物等の資料は総社市埋蔵文化財学習の館で保管している。
7. 本書の刊行にあたり、御指導・御教示を賜った関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

目 次

序 文

例 言

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2004年度 埋蔵文化財行政の概要 1

2. 立会および確認調査の概要

農家住宅建設に伴う立会調査 5

地区集会所改築に伴う立会調査 6

個人住宅増築に伴う立会調査 7

個人住宅建設に伴う立会調査 8

個人住宅建設に伴う立会調査 9

個人住宅建設に伴う立会調査 10

個人住宅建設に伴う立会調査 11

個人住宅増築に伴う立会調査 12

個人住宅建設に伴う立会調査 13

個人住宅建設に伴う立会調査 14

自動車修理工場建設に伴う立会調査 15

3. 発掘調査の概要

駅南区画整理事業に伴う発掘調査 19

平成16年度 鬼城山発掘調査の概要 22

し尿処理場（浄化園）増築に伴う発掘調査(2) 26

国府川改修工事に伴う発掘調査(1) 29

幼稚園園舎増築工事に伴う発掘調査 38

平成16年度 水内ほ場整備事業に伴う発掘調査概要 40

真壁遺跡（中央四丁目地点）の発掘調査概要 42

共同住宅建設に伴う発掘調査 44

4. 史跡整備事業の概要

平成16年度 鬼山城環境整備事業 47

5. 付 載

新山寺関連の出土遺物について 51

経山城の台風被害について 53

中田啓司氏寄贈の瓦 58

目 次

<p>第1図 発掘・立会・確認調査位置図 (S = 1/50,000) 3</p> <p style="padding-left: 20px;">農家住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第2図 調査地位置図 (S = 1/8,000) 5</p> <p>第3図 土層柱状図 (S = 1/40) 5</p> <p style="padding-left: 20px;">地区集会所改築に伴う立会調査</p> <p>第4図 調査地位置図 (S = 1/8,000) 6</p> <p>第5図 土層柱状図 (S = 1/40) 6</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅増築に伴う立会調査</p> <p>第6図 調査地位置図 (S = 1/8,000) 7</p> <p>第7図 土層柱状図 (S = 1/60) 7</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第8図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 8</p> <p>第9図 土層柱状図 (S = 1/40) 8</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第10図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 9</p> <p>第11図 土層柱状図 (S = 1/40) 9</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第12図 調査地位置図 (S = 1/8,000) 10</p> <p>第13図 土層柱状図 (S = 1/40) 10</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第14図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 11</p> <p>第15図 土層柱状図 (S = 1/40) 11</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅増築に伴う立会調査</p> <p>第16図 調査地位置図 (S = 1/8,000) 12</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第17図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 13</p> <p>第18図 土層柱状図 (S = 1/40) 13</p> <p style="padding-left: 20px;">個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第19図 調査地位置図 (S = 1/8,000) 14</p> <p>第20図 土層柱状図 (S = 1/40) 14</p> <p style="padding-left: 20px;">自動車修理工場建設に伴う立会調査</p> <p>第21図 調査地位置図 (S = 1/10,000) 15</p> <p>第22図 調査区配置図 (S = 1/1,000) 16</p> <p>第23図 遺構配置図 (S = 1/60) 16</p> <p>第24図 土層柱状図 (S = 1/60) 16</p> <p>第25図 遺構配置図 (S = 1/60) 16</p> <p>第26図 東壁土層図 (S = 1/60) 16</p> <p>第27図 出土遺物<1> (S = 1/4) 16</p> <p>第28図 遺構配置図 (S = 1/60) 17</p> <p>第29図 東壁土層図 (S = 1/60) 17</p> <p>第30図 出土遺物<2> (S = 1/4) 17</p> <p style="padding-left: 20px;">駅南区画整理事業に伴う発掘調査</p> <p>第31図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 19</p> <p>第32図 土塙 - 7 平・断面図 (S = 1/50) 20</p> <p>第33図 幹線1号Ⅲ区遺構配置図 (S = 1/300) 21</p> <p>第34図 土塙 - 2 出土壺 (S = 1/4) 21</p>	<p style="padding-left: 20px;">平成16年度 鬼城山発掘調査の概要</p> <p>第35図 鬼ノ城全体図 (S = 1/8,000) 23</p> <p>第36図 第1水門貯水池位置図 (S = 1/1,500) 24</p> <p>第37図 土堤状遺構平・断面図 (S = 1/400) 25</p> <p style="padding-left: 20px;">し尿処理場(浄化園)増築に伴う発掘調査(2)</p> <p>第38図 平成16年度調査区位置図 (S = 1/2,000) 26</p> <p>第39図 遺構配置図 (S = 1/300) 27</p> <p style="padding-left: 20px;">国府川改修工事に伴う発掘調査(1)</p> <p>第40図 調査地位置図 (S = 1/10,000) 29</p> <p>第41図 御所遺跡遺構配置図 (S = 1/200) 30</p> <p>第42図 梵鐘铸造土塙 (SK01) 平面図 (S = 1/40) 30</p> <p>第43図 御所遺跡石敷井戸出土呪符木簡 (S = 1/2) 31</p> <p>第44図 SE01平面図 (S = 1/30) 32</p> <p>第45図 御所遺跡出土遺物(1) (S = 1/4) 34</p> <p>第46図 御所遺跡出土遺物(2) (S = 1/4) 35</p> <p>第47図 御所遺跡出土遺物(3) (S = 1/4) 36</p> <p>第48図 SD01・02断面図 (S = 1/60) 37</p> <p style="padding-left: 20px;">幼稚園園舎増築工事に伴う発掘調査</p> <p>第49図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 38</p> <p>第50図 遺構配置図 (S = 1/200) 39</p> <p>第51図 土層模式図 (S = 1/40) 39</p> <p style="padding-left: 20px;">平成16年度 水内ほ場整備事業に伴う発掘調査概要</p> <p>第52図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 41</p> <p style="padding-left: 20px;">真壁遺跡(中央四丁目地点)の発掘調査概要</p> <p>第53図 トレンチ配置図と土層模式図 (S = 1/1,000・1/50) 43</p> <p>第54図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 44</p> <p style="padding-left: 20px;">共同住宅建設に伴う発掘調査</p> <p>第55図 調査地位置図 (S = 1/5,000) 44</p> <p>第56図 遺構配置図 (S = 1/200) 45</p> <p>第57図 土層模式図 (S = 1/40) 45</p> <p style="padding-left: 20px;">平成16年度 鬼城山環境整備事業</p> <p>第58図 鬼城山環境整備地区図 (S = 1/2,000) 49</p> <p style="padding-left: 20px;">新山寺関連の出土遺物について</p> <p>第59図 新山廃寺遺構配置図 (S = 1/10,000) 51</p> <p>第60図 鬼の釜実測図 (S = 1/30) 51</p> <p>第61図 出土遺物 (S = 1/4) 52</p> <p style="padding-left: 20px;">経山城の台風被害について</p> <p>第62図 経山城位置図 (S = 1/50,000) 53</p> <p>第63図 経山城要図 (S = 1/2,000) 53</p> <p>第64図 石垣崩壊箇所平・立面図 (S = 1/60) 54</p> <p>第65図 築石計測位置図 54</p> <p>第66図 北の郭土塁断面 (S = 1/60) 55</p> <p>第67図 虎口付近表採 (S = 1/4) 55</p>
--	---

中田啓司氏寄贈の瓦	
第68図 瓦採集位置図 (S = 1/8,000)	58
第69図 瓦実測図 (S = 1/4)	59

図 版 目 次

農家住宅建設に伴う立会調査		第18図版 遺構検出状況	28
第1図版 土層断面 (南西から)	5	第19図版 SH15・SH16全景 (南から)	28
地区集会所改築に伴う立会調査		第20図版 土墳墓 - 1	28
第2図版 土層断面 (南西から)	6	国府川改修工事に伴う発掘調査(1)	
個人住宅増築に伴う立会調査		第21図版 調査区全景	30
第3図版 土層断面	7	第22図版 SE01全景	30
個人住宅建設に伴う立会調査		幼稚園園舎増築工事に伴う発掘調査	
第4図版 土層断面	8	第23図版 完掘状況 (北東から)	39
個人住宅建設に伴う立会調査		第24図版 柱穴半掘状況 (北から)	39
第5図版 調査地全景	9	平成16年度 水内ほ場整備事業に伴う発掘調査概要	
第6図版 土層断面	9	第25図版 薬師堂下遺跡 竪穴住居	40
個人住宅建設に伴う立会調査		真壁遺跡 (中央四丁目地点) の発掘調査概要	
第7図版 調査地遠景	10	第26図版 T - 8 (東から)	42
第8図版 土層断面	10	共同住宅建設に伴う発掘調査	
個人住宅建設に伴う立会調査		第27図版 調査地遠景 (南西から)	45
第9図版 調査地遠景	11	第28図版 完掘状況 (東から)	45
第10図版 土層断面	11	平成16年度 鬼山城環境整備事業	
個人住宅増築に伴う立会調査		第29図版 西門・角楼間の土塁と園路	50
第11図版 掘削部 (南東から)	12	第30図版 角楼表示 (床と版築土塁)	50
個人住宅建設に伴う立会調査		第31図版 ガイダンス施設	50
第12図版 土層断面	13	経山城の台風被害について	
個人住宅建設に伴う立会調査		第32図版 石垣の被害状況	54
第13図版 調査地遠景	14	第33図版 石垣検出状況 (北から)	57
第14図版 土層断面	14	第34図版 築石転落状況	57
自動車修理工場建設に伴う立会調査		第35図版 築石の仮置き状況	57
第15図版 完掘状況 (南東から)	16	第36図版 裏込石	57
第16図版 完掘状況 (西から)	16	第37図版 石垣と裏込石 (西から)	57
し尿処理場 (浄化園) 増築に伴う発掘調査(2)		第38図版 築石の引上げ作業	57
第17図版 調査区遠景 (北から)	28	第39図版 遺構の保護処置	57

表 目 次

平成16年度発掘調査一覧表	2	平成16年度立会・確認調査一覧表	2
---------------------	---	------------------------	---

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2004年度 埋蔵文化財行政の概要

総社市の埋蔵文化財行政は、教育委員会文化課文化財係が担当している。埋蔵課文化財調査のほか、史跡整備事業、埋蔵文化財保護行政、文化財一般の調査・保護・啓発を執り行っている。

[組織]

教育長	栗田 交三
教育次長	平田 充宏
参事兼文化課長	加藤 信二
課長補佐	谷山 雅彦
主 査	平井 典子
主 査	武田 恭彰
主 任	前角 和夫
主 事	高橋 進一
主 事	笹田 健一
主 事	松尾 洋平
臨時職員	吉村 瞳

(埋蔵文化財学習の館)

館 長	村上 幸雄
臨時職員	近藤 雅子
臨時職員	田中 富子

[埋蔵文化財の調査]

2004年度に実施した発掘調査は、8件と例年並であったが、民間企業の景気回復傾向を反映してか自動車修理工場の建設や集合住宅建設に伴う発掘調査等が行われている。また、し尿処理施設の新設に伴い、一部事務組合（総社広域環境施設組合）の依頼による発掘調査も実施している。

店舗・共同住宅・個人住宅建設も依然好調で、立会・確認調査を実施した小規模開発の大半を占めている。

[文化財保護・啓蒙]

文化財保護では、市制50周年記念事業として、「鬼ノ城フォトコンテスト」を開催し、市内外から約350点の応募作品が集まった。

指定史跡の下刈り清掃は、鬼城山・経山城・作山古墳・宮山墳墓群・栢寺廃寺・江崎古墳・秦原廃寺について実施した。

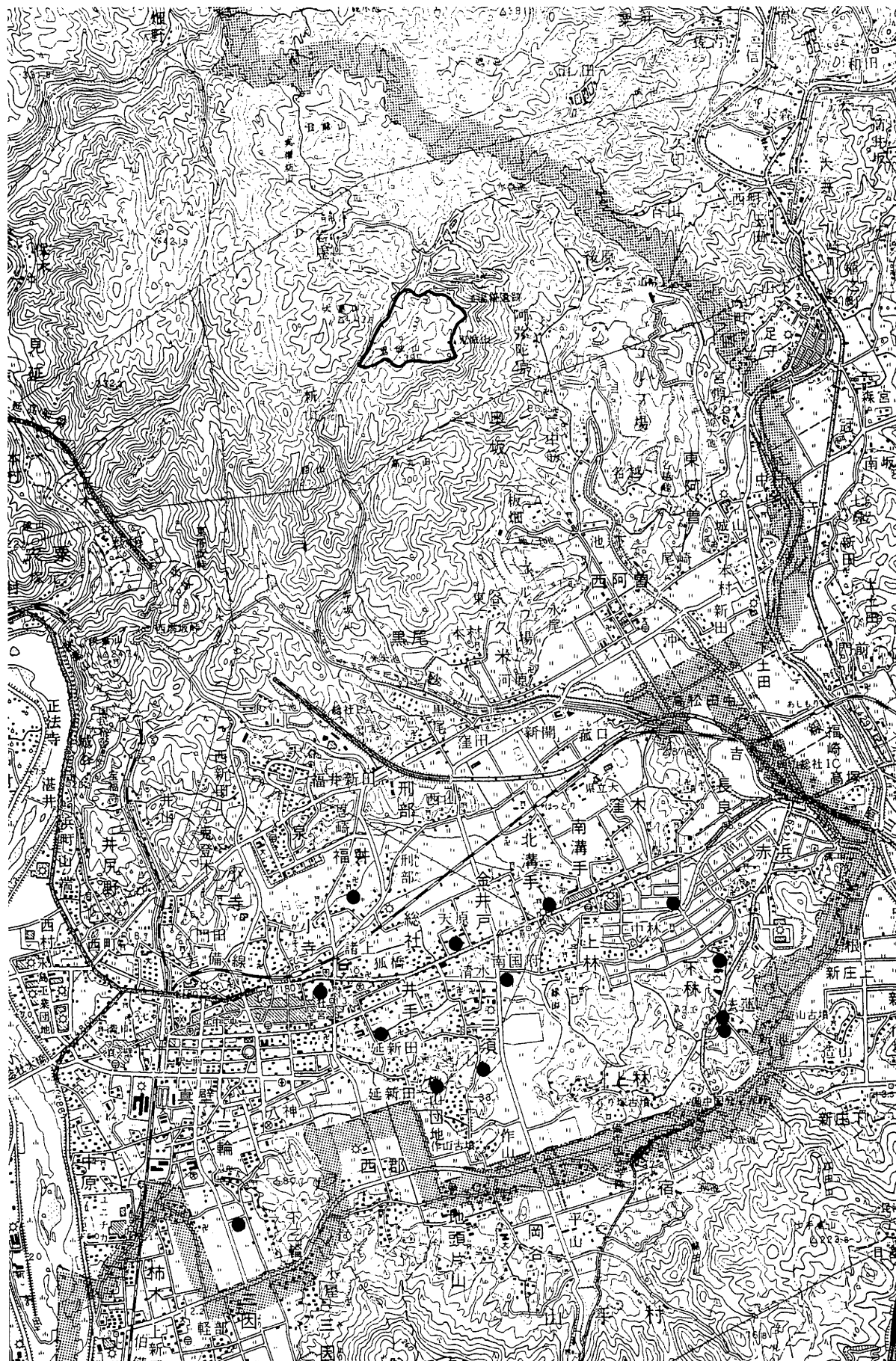
鬼ノ城整備については、6月3日・8月11日・11月18日の計3回の鬼城山整備委員会を開催し、整備事業の協議・指導をうけた。整備工事については、角楼表示・土塁復元・板塀表示・園路造成・ガイダンス施設建設をおこなった。(高橋進一)

平成16年度発掘調査一覧表

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 契 機	調 査 期 間
①	窪木薬師遺跡	窪木1101-1	し尿処理施設建設	H.16.4.1~7.31
②	鬼城山	奥坂1762ほか	史跡整備事業	H.16.4.19~7.29
③	真壁遺跡群	真壁648-3ほか	区画整理道路建設	H.16.4.26~17.3.31
④	総社跡	総社2-10ほか	幼稚園園舎建設	H.16.9.15~10.15
⑤	三須畠田遺跡	井手793-9・1471-6	自動車修理工場	H.16.9.20~10.31
⑥	御所遺跡	金井戸291-6ほか	河川改修	H.17.1.24~3.31
⑦	井手村後遺跡	井手1180-1・4	集合住宅建設	H.17.3.8~3.10
⑧	水内遺跡	原地内	県営ほ場整備事業	H.16.11.1~17.1.31

平成16年度立会・確認調査一覧表

	所 在 地	調 査 契 機	調 査 日 時	種 別	調 査 所 見
1	三輪	個人住宅新築	4月6日	立 会	遺構・遺物無し
2	下林1235	公会堂新築	4月7日	立 会	遺構・遺物無し
3	美袋631	病院施設建設	6月1日	立 会	遺構・遺物無し
4	三須1416-7	個人住宅新築	6月9日	立 会	遺構・遺物無し
5	久代古母池649	個人住宅新築	6月23日	立 会	遺構・遺物無し
6	福井56-16	個人住宅新築	6月24日	立 会	遺構・遺物無し
7	下林法蓮1332-2	個人住宅新築	7月8日	立 会	遺構・遺物無し
8	真壁	分譲宅地造成	8月10日	立 会	遺構・遺物無し
9	下林法蓮1252-2	個人住宅新築	11月2日	立 会	遺構・遺物無し
10	安原アパート	集合住宅新築	11月2日	確 認	住居址確認
11	東阿曾1997	個人住宅新築	12月2日	立 会	遺構・遺物無し
12	三須	個人住宅新築	12月6日	立 会	遺構・遺物無し
13	井手503-4	個人住宅新築	1月13日	立 会	遺構・遺物無し



第1図 発掘・立会・確認調査位置図 (S=1/50,000)

2. 立会および確認調査の概要

農家住宅建設に伴う立会調査

所在地 三輪字高田228-3

調査期間 2004年4月6日

調査概要

総社市街地南端に位置する三輪丘陵の西麓には、すでにほ場整備が実施された水田地帯が広がる。市街化調整区域ではあるが、近年水田部分を造成し宅地化している箇所も少しずつではあるが見受けられるようになってきた。

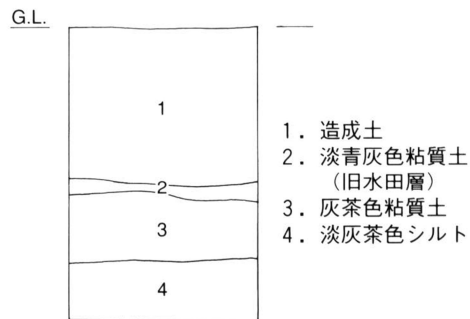
建設予定地は、一昨年度立会調査を実施し^註、低湿地であることが判明した共同住宅建設地から北西約250mの地点に位置する。一昨年度の調査結果から、当該地も低位部である可能性は高かったが、浄化槽を掘削する際に、土層の堆積状況を確認し低位部の広がりを押さえることにした。

調査の結果、約80cmの造成土直下には10cm程度の旧水田層が堆積し、その下層は灰茶色粘質土層から淡灰茶色シルト層へと続くことが確認できた。以上の堆積状況から、当初の予測通りこの付近にも低位部が広がることが判明した。 (平井)

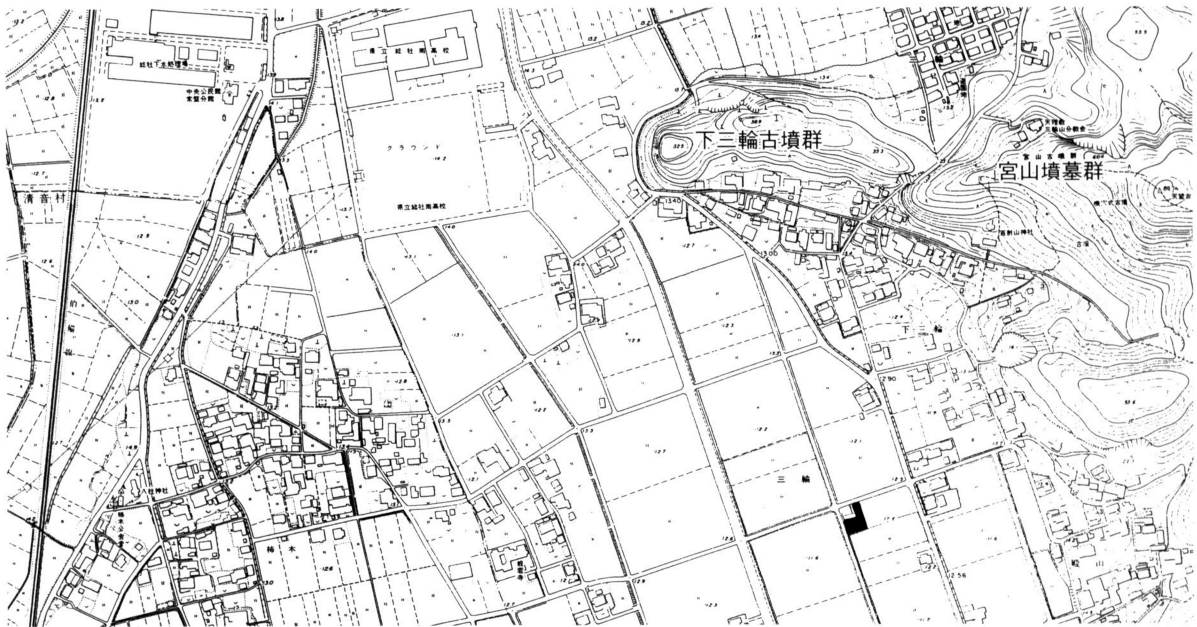
註 平井典子 2004「共同住宅建設に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』13 総社市教育委員会



第1図版 土層断面 (南西から)



第3図 土層柱状図 (S=1/40)



第2図 調査地位置図 (S=1/8,000)

地区集会所改築に伴う立会調査

所在地 下林字志茂林820番6, 820番7

調査期間 2004年4月7日

調査概要

総社市の東部，岡山市との境界に近い下林の地区集会所が改築されることになった。基礎工法は布基礎で，地表面から約1m掘削する予定であった。

改築予定地のすぐ南には，両袖の横穴式石室をもち石室残存長約14mを測る翁塚古墳が所在し，また付近には下林古墳群に属する古墳が点在する。当該地は丘陵の一部を切断・削平していることから，古墳や遺跡が存在したとしてもすでに消失しているものと考えられたが，一部遺構が残存している可能性もあり，布基礎掘削時に立会調査をすることとした。

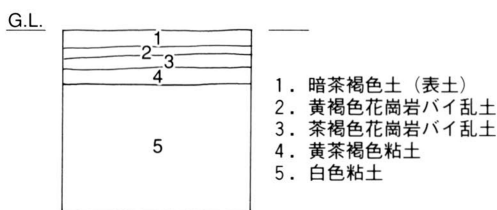
調査の結果，10cm弱の表土下には花崗岩のバイ乱土層が認められ，その下層には山土起源の白色粘土層が厚く堆積していた。一部には火を受けたような土や落ち込みなどもみられたが，人為的なものではないと考えられた。また，白色粘土は，南中央付近で地表面から-30cmと高く，北端は-145cmと最も低い。東は-75cmを測り，このことから地形は北，東方向に下がっていくものと考えられる。

以上，改築予定地においては遺物の出土はなく，古墳や，遺跡の築かれた痕跡も認められなかった。

(平井)



第2図版 土層断面 (南西から)



第5図 土層柱状図 (S=1/40)



第4図 調査地位置図 (S=1/8,000)

個人住宅増築に伴う立会調査

所在地 見延字藪田1739

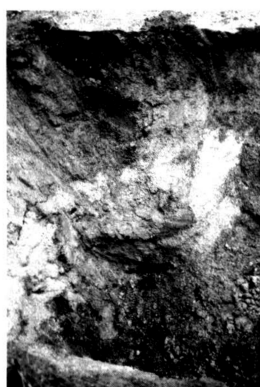
調査期間 2004年6月9日

調査概要

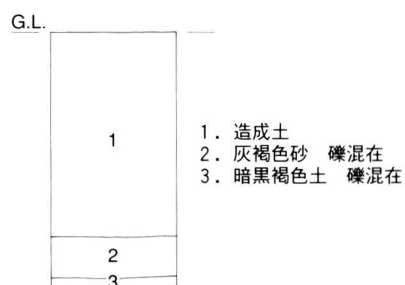
増築予定地は、総社市の中央部東よりに位置し、高梁川との合流地点に近い槇谷川左岸の谷筋に立地する。北側の山裾付近には、横穴式石室を持つ7基の古墳からなる藪田古墳群が所在し、当該地にも何らかの遺跡が存在する可能性があったため、浄化槽掘削時に立会調査を実施した。

調査の結果、造成土の下は砂が厚く堆積し、遺構・遺物は確認できなかった。槇谷川の氾濫原と考えられる。

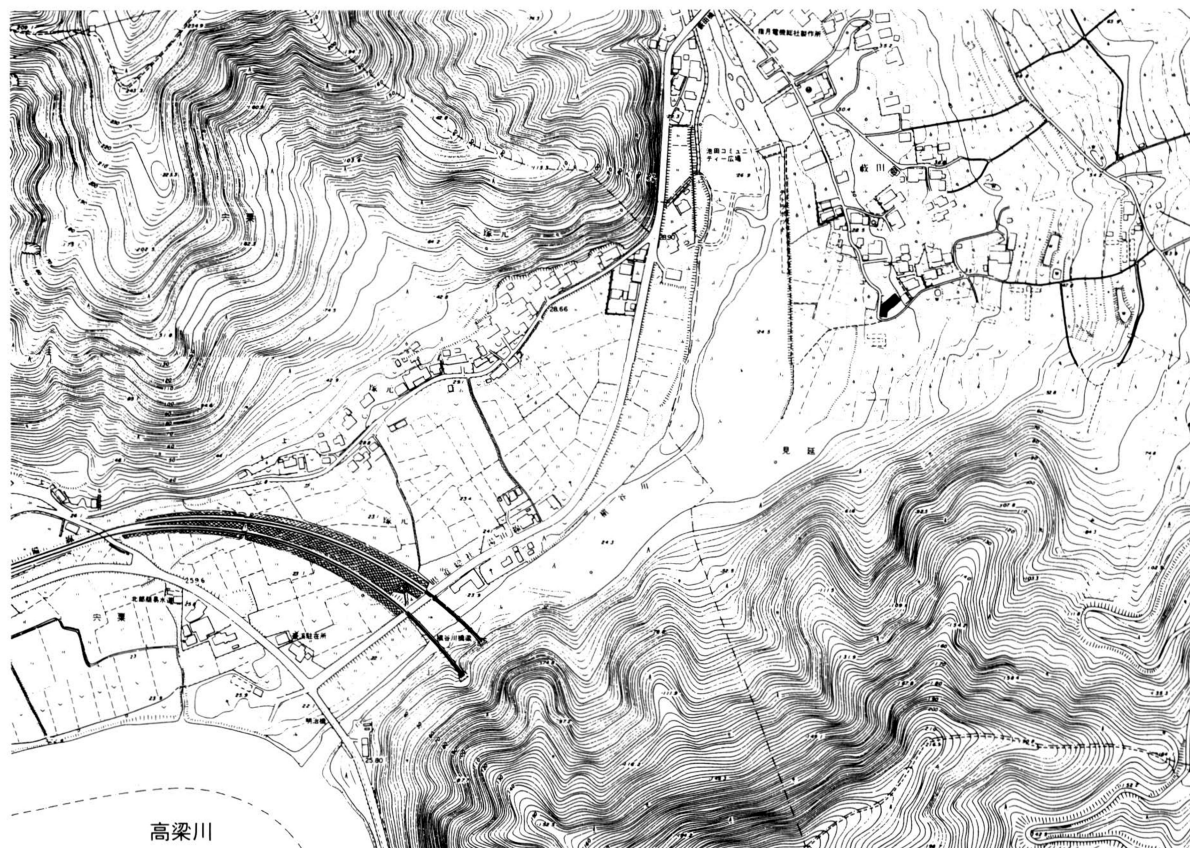
(平井)



第3図版 土層断面



第7図 土層柱状図 (S=1/60)



第6図 調査地位置図 (S=1/8,000)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市三須141

調査期間 2004年6月9日

調査概要

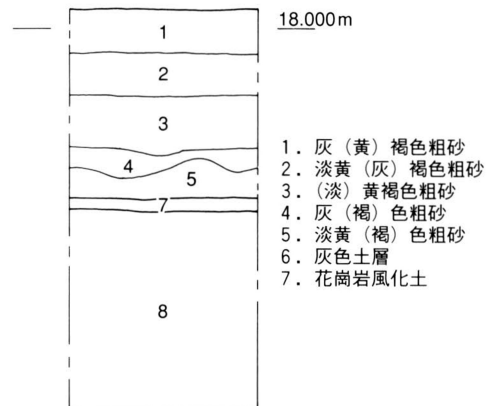
本調査は、個人住宅建設に伴う浄化槽掘削の立会調査として実施した。

調査地は、作山古墳の北側に隣接する桃山の小丘陵上に位置しており、現況は、丘陵を削平して造成された平坦地である。この地は、吉備路風土記の丘陵立自然公園の中心地に位置しており、周辺には古代山城鬼ノ城・こうもり塚古墳・江崎古墳・造山古墳・備中国分寺・国分尼寺等の古代吉備地方を代表する遺跡が集中している。

調査地の基本的な層序は、岩盤が風化した花崗岩の風化土層の上に、丘陵切断後の自然堆積層と考えられる厚さ約7cmの灰色土層があり、その上には約1mの厚さの客土と考えられる土層となっていた。これらのことより、低丘陵上の斜面を切断して放置していた後に客土して、宅地を造成したものと考えられた。遺構・遺物は確認できなかった。 (高橋)



第4図版 土層断面



第9図 土層柱状図 (S=1/40)



第8図 調査地位置図 (S=1/5,000)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市久代字古母池649-1

調査期間 2004年6月23日

調査概要

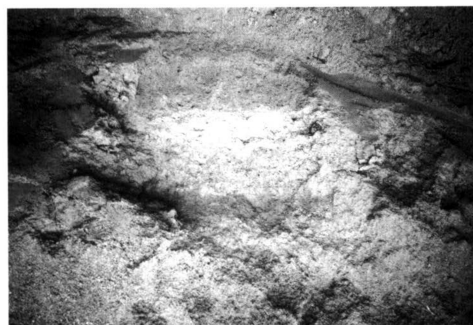
本調査は、個人住宅の浄化槽掘削の立会調査として実施した。

調査地は、新本川と小田川に挟まれる山塊の北辺に位置している。この山塊の調査地の東方では、水島機械金属工業団地共同組合西団地建設に伴って発掘調査が実施され、数多くの集落跡・古墳・製鉄遺跡が明らかになっている。

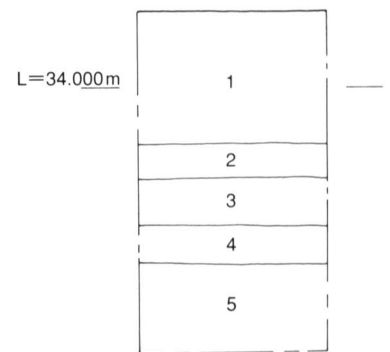
調査地の現状は宅地であり、既存の家屋を撤去した後に新家屋の建設がおこなわれた。家屋の基礎部分は既に以前の家屋の基礎によって掘削されていたため、浄化槽部分のみ立会調査をおこなった。基本的な層序は、真砂土（造成土）～旧畑耕作土～淡橙黄色土～淡黄灰色土～（淡）茶黄（褐）色土であった。旧畑耕作土以下の土層は、真砂土が多く混入しており、造成土の可能性が高いと判断された。（高橋）



第5図版 調査地全景



第6図版 土層断面



1. 真砂土造成
2. 灰茶褐色土（旧畑土）
3. 淡橙黄色土
4. 淡黄灰色土
5. （淡）茶黄（褐）色土

第11図 土層柱状図
(S=1/40)



第10図 調査地位置図 (S=1/5,000)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市福井56-16

調査期間 2004年6月24日

調査概要

本調査は、個人住宅建設に伴う浄化槽掘削の立会調査として実施した。

調査地は、総社市街地の北方にあり、高梁川から取水した用水の流路沿いに位置している。調査地の現況は、水田上に客土をした宅地である。周辺には、南約700mには総社宮が、北東約1kmの西山山塊には西山古墳群がある。また、調査地から半径約4kmの円内には吉備路風土記の丘周辺の遺跡群や古代山城・鬼ノ城をはじめ、近年調査された金井戸から三須にかけての官衙関連遺構など古代吉備の中心となる遺跡が存在しており、調査地周辺では微高地と旧河道が複雑に入り組んで存在していると考えられる。

調査地の基本的な層序は、造成土の下に水田耕作土層と考えられる層があり、その下は順に、古い地上げ層と考えられる茶灰褐色土層～旧水田層と考えられる茶(灰)褐色土層～低湿地堆積土層と考えられる(暗)灰青色粘土層の順で堆積していた。遺構・遺物は確認できなかった。(高橋)



第7図版 調査地遠景

第8図版 土層断面

第13図 土層柱状図
(S=1/40)



第12図 調査地位置図 (S=1/8,000)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市下林1332-2

調査期間 2004年7月8日

調査概要

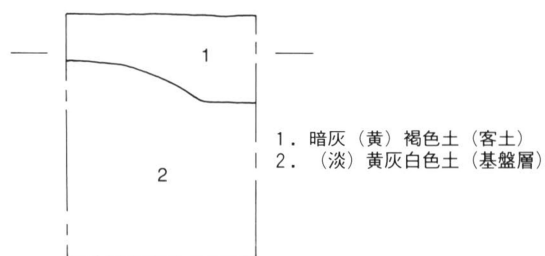
本調査は、個人住宅建設に伴う浄化槽掘削の立会調査として実施した。

調査地は、総社市域の南東角に位置しており、現況は、低丘陵上に位置する宅地である。この地は、古代吉備の中心に位置しており、周辺には、造山古墳・作山古墳・こうもり塚古墳・江崎古墳等の吉備の盟主墳や、備中国分寺・国分尼寺等全国有数の遺跡が存在している。

調査地の基本的な層序は、造成土と考えられる暗灰（黄）褐色土層があり、その下は基盤層である（淡）黄灰白色土（花崗岩風化土層）となっていた。これらのことより、丘陵端部の緩斜面を僅かに加工して宅地を造成したものと考えられた。遺構・遺物は確認できなかった。（高橋）



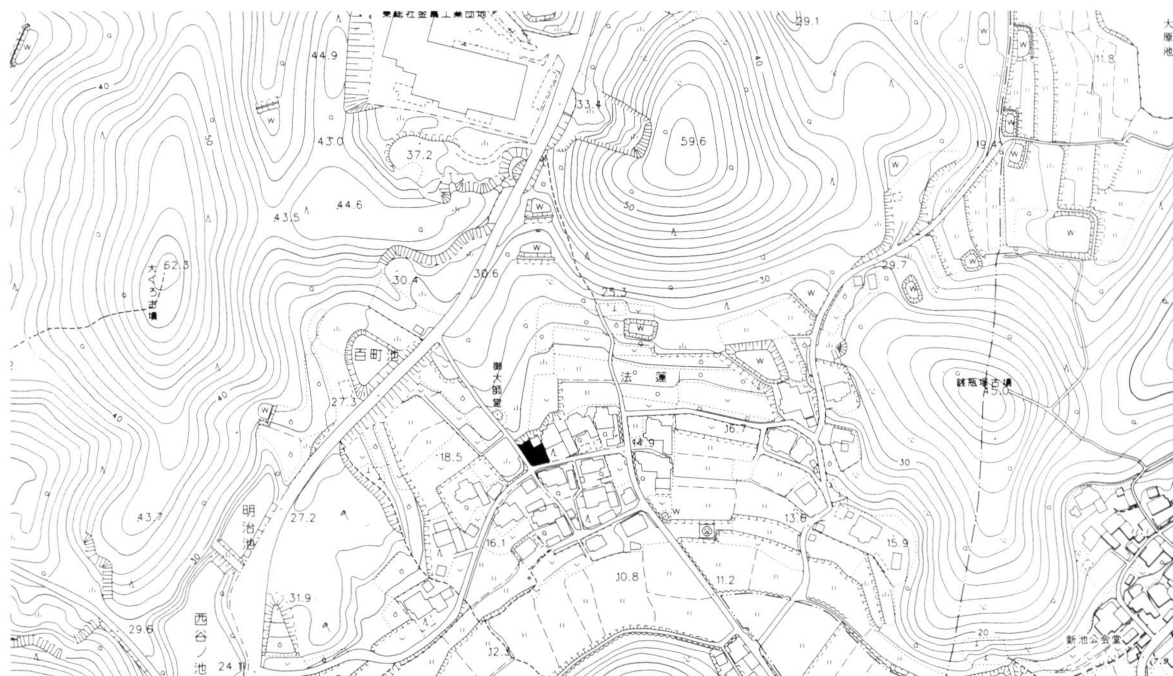
第9図版 調査地遠景



第15図 土層柱状図（S=1/40）



第10図版 土層断面



第14図 調査地位置図（S=1/5,000）

個人住宅増築に伴う立会調査

所在地 総社市奥坂字中筋228番地

調査期間 2004年7月13日

調査概要

建設予定地は、総社市北東部、血吸川右岸の谷筋に立地し、耕作土中より弥生時代の土器片等が採集された中筋遺跡の包蔵地に当たる。また、県教育委員会が調査し、時期は不明であるが人工的構築物と判明した水城状遺構^註の南西に位置する。

増築箇所はベタ基礎のため、掘削は浅く造成土中でおさまるが、浄化槽を設置することから埋設塙掘削時に立会調査をすることとした。

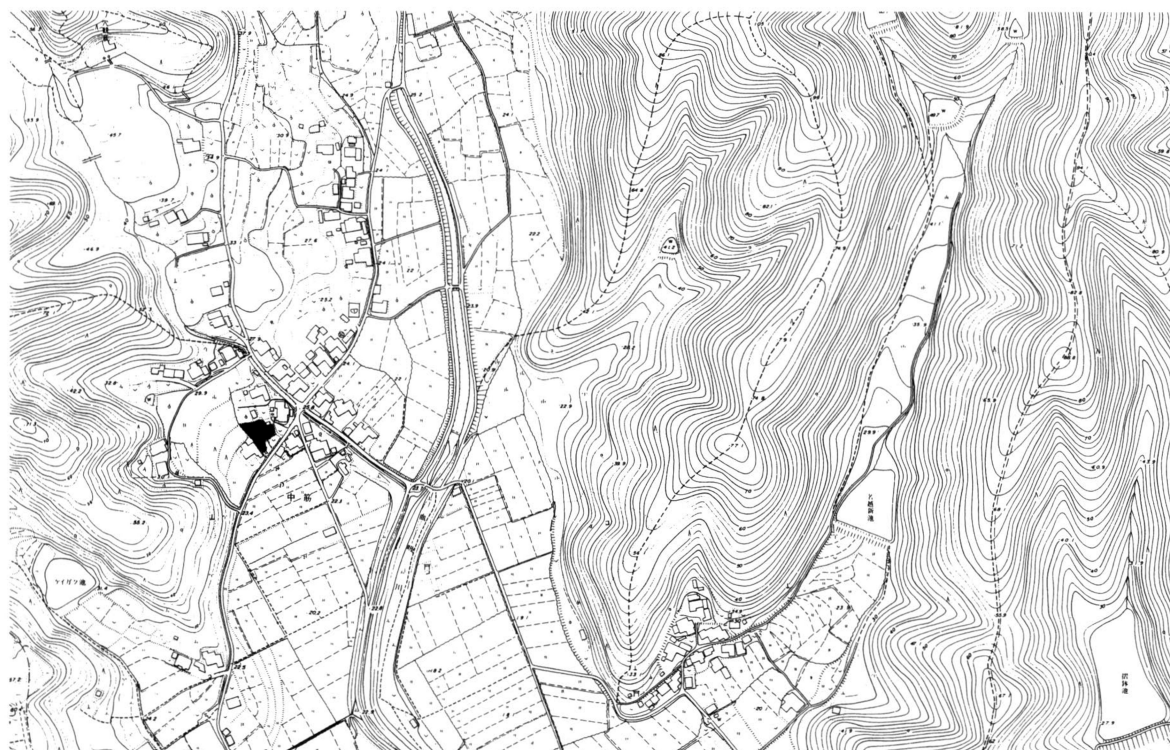
連絡を受け現地に赴いたが、すでに掘削は進み地盤がもろいことから矢板が打ち込まれていた。矢板の間隙から観察すると、造成土の下は砂質土層で下層へ行くにしたがい砂層に変わる。

血吸川の氾濫原に当たるものと考えられ、遺構・遺物は検出できなかった。(平井)

註 亀山行男「(2)国指定史跡(鬼城山)整備事業に伴う確認調査 2.池ノ下散布地」『岡山県埋蔵文化財報告』30
2000



第11図版 掘削部（南東から）



第16図 調査地位置図 (S=1/8,000)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市東阿曾1997

調査期間 2004年12月2日

調査概要

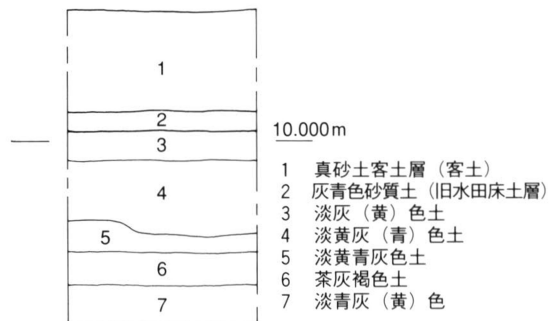
本調査は、個人住宅建設に伴う浄化槽掘削の立会調査として実施した。

調査地は水田上に客土して造成された宅地上に位置しており、既存建物に隣接して増築が行われることに伴って立会調査を実施した。阿曾地域は、古くから製鉄が盛んな地域として知られ、鋳物製作が伝統工芸として有名であるが、現在では、伝統技術を用いて野鍛冶を行っている傳承者が1名残っているのみである。調査地の北約1kmには、6世紀後半に位置づけられる日本最古級の製鉄遺跡が発見された千引カナクロ谷遺跡が存在しており、連綿と鉄・鉄器生産が継続されていた可能性が高いと考えられる。また、調査地の北西約2kmには、古代山城として有名な鬼ノ城が存在している。

調査地の基本的な層序は、造成土である真砂土層の下に旧水田床土層があり、それ以下は河川堆積土層と考えられる淡灰（黄）色～茶灰褐色を基調とする砂質の強い土層が堆積していた。遺構・遺物は確認できなかった。 (高橋)



第12図版 土層断面



第18図 土層柱状図 (S=1/40)



第17図 調査地位置図 (S=1/5,000)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市井手503-4

調査期間 2005年1月13日

調査概要

本調査は、個人住宅建設に伴う浄化槽掘削の立会調査として実施した。

調査地の現況は、水田上に客土をした宅地である。調査地は、旧総社市街地の南縁に位置しており、微高地の端部に立地している可能性が予想された。周辺には、東方約900mに三須廃寺の存在が予想されており、また南東約1.2kmには、全長286mの全国第9位の墳丘規模をもつ国指定史跡作山古墳が存在している。また、北西約700mには総社宮がある。

調査地の基本的な層序は、1. 造成土の下に2. 旧水田層と考えられる層があり、その下は、3. 灰青色土（中・近世水田層）～4. 黄灰色土（床土層）～5. （暗）茶灰褐色土（包含層）～6. 黄（灰）褐色土（包含層）～7. 灰茶褐色土（以下ベース層）～8. 灰（青）色砂礫層～9. 灰色砂層～10. 灰（茶）色砂礫層の順で堆積していた。

遺構は確認できなかったが、包含層中から弥生土器片が出土している。

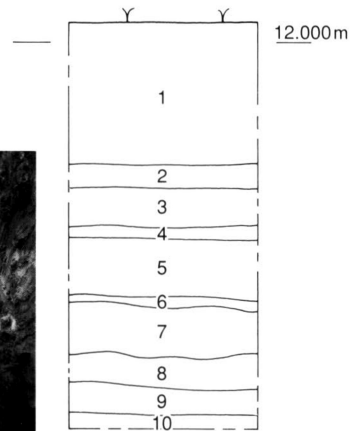
(高橋)



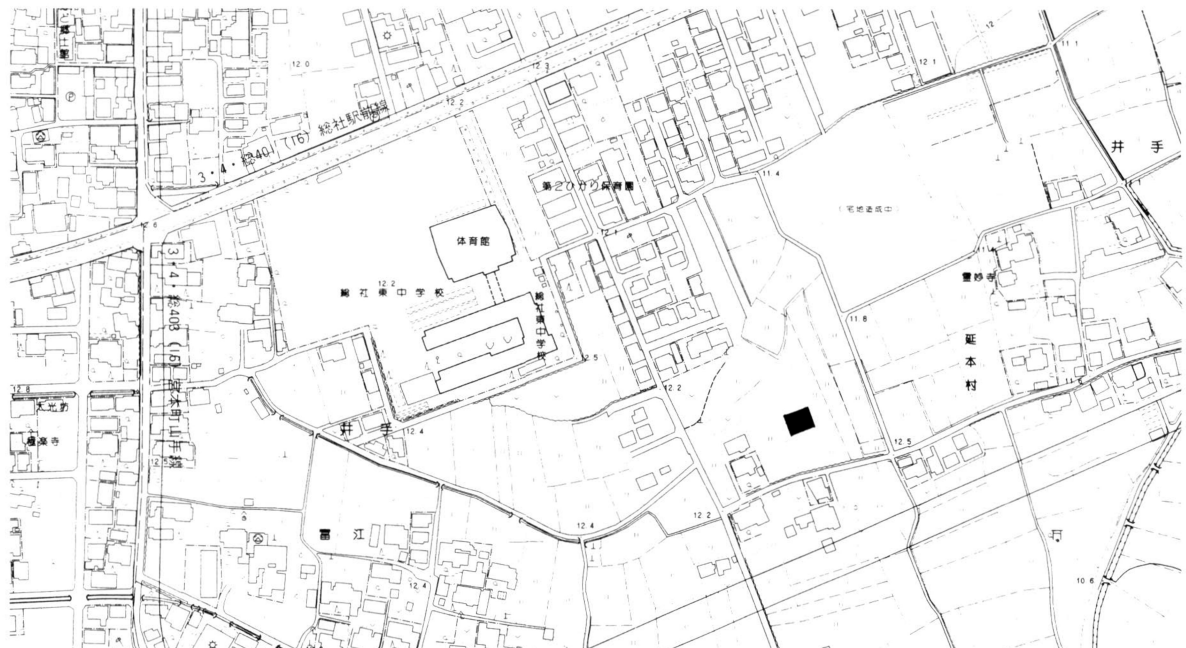
第13図版 調査地遠景



第14図版 土層断面



第20図 土層柱状図
(S=1/40)



第19図 調査地位置図 (S=1/8,000)

自動車修理工場建設に伴う立会調査

遺跡名 井手見延遺跡

所在地 井手字見延793番9, 井手1471番6

調査期間 2004年10月28日, 2005年1月17・18日, 2月14日

調査概要

建設予定地は、総社市街地の東にあたり、一般市道中央井手本線と国道429号線との交差点北東部付近に位置する。

国道429号線改良工事に伴う発掘調査^註では、建設予定地の西側から住居址をはじめとした遺構が数多く検出されており、建設予定地内にも当然遺構が広がるものと想定された。

建物部分の基礎工事に伴う掘削は、すべて造成土内でおさまるが、4槽油水分離槽と浄化槽部分は地表面から約1.5～2m程度掘削される予定であった。そのため調査が必要となるが、面積が狭いため、掘削時に立会い、遺構が検出された場合は記録保存をすることとした。

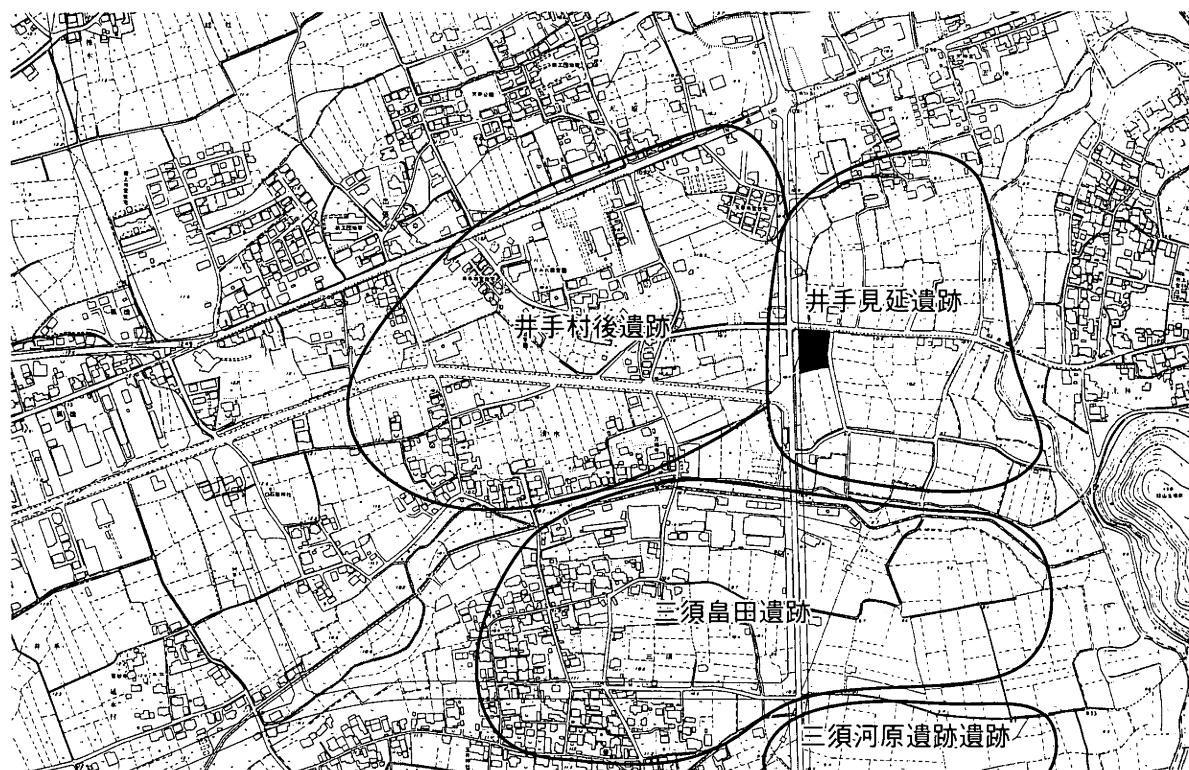
立会調査は、工事の進行に合わせて実施し、まず油水分離槽、次いで合併浄化槽部分を調査した。その後、看板を設置するため掘削するとの連絡が入り、急遽この部分も調査することになった。

以下、各掘削部分ごとに調査結果を記す。

油水分離槽部分

基本層序は、約1m弱の造成土下に15cm前後の旧耕作土がみられ、さらに下層は5cm程度の旧水田層、20cm余りの包含層、そして淡灰褐色砂質土の自然堆積層へと続く。

遺構は、淡灰褐色砂質土層上面で検出されたが、遺構密度は低く柱穴が4基、杭痕跡が2箇所確認されたのみである。範囲が狭いためつながりは不明である。



第21図 調査地位置図 (S=1/10,000)

合併浄化槽部分

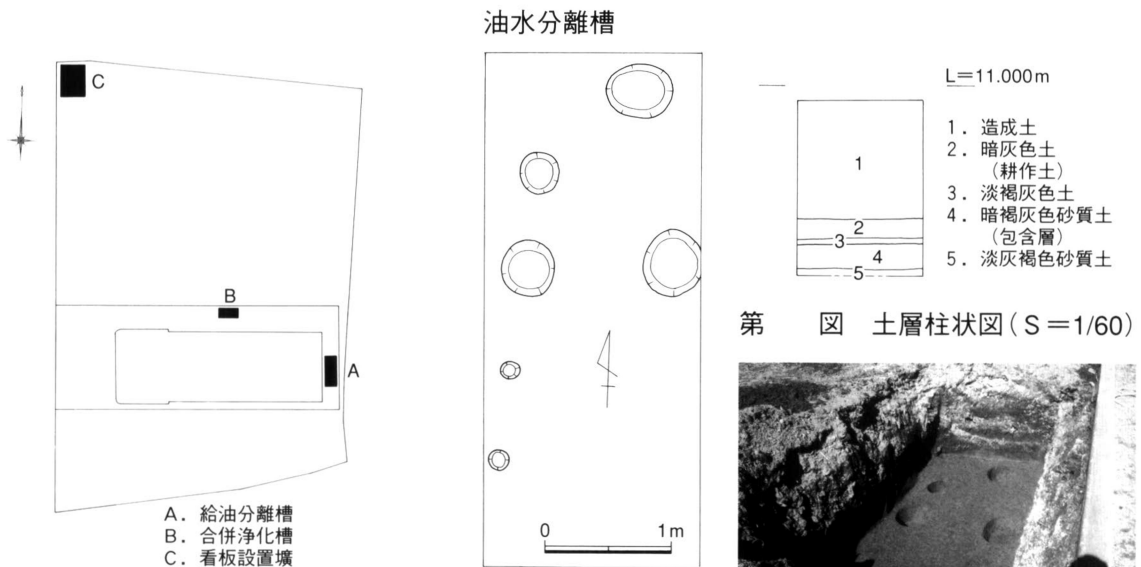
90cm弱の造成土直下には15cm程度の旧耕作土が、その下層には青褐色の旧水田層が認められる。さらに下層には、自然堆積層と考えられる粘質土が堆積し、上半はグライ化により青灰色を呈する。

遺構はこの自然層を切って存在し、南端において住居址の一部が検出された。壁体溝が認められ、南に広がる円形の住居址と想定される。出土遺物は少ないが、図示し得た1・2の高坏脚部から、弥生時代の年代が与えられる。この他の遺構としては、北端に柱穴が1/2程度確認された。

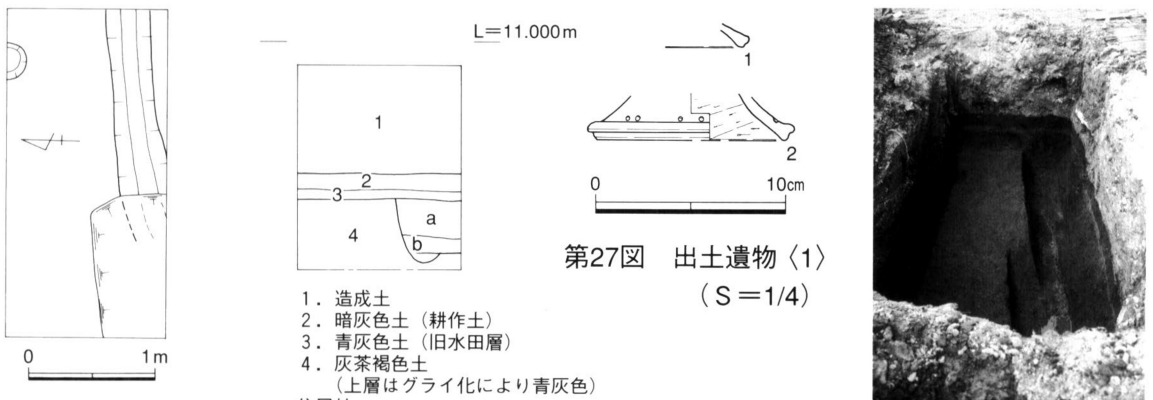
看板設置壇部分

基本的層序は、最上層に90cm程度の造成土、その直下には旧耕作土、そして近代以降と考えられる堆積層へと続く。これより下層では他の調査区と大きく異なり、約50cmの厚さに6層の旧水田層と床土が認められたことから、地形が北に向かって下がっていくことが判明した。さらに下層においては、約10cmのやや淡い灰褐色土の包含層が存在し、黄褐色土の自然堆積層へと続く。

遺構は黄褐色土層の上面で検出され、調査区を北から南に横切る溝1条、柱穴1基、およびたわみ



合併浄化槽



が検出された。溝は深さ25cm程度で、中層の黒灰色粘質土の上下に茶系の粘質土が認められる。

遺物は少量であり、図示できるものは12点であった。

3～7は溝からの出土遺物である。3, 4は上層から, 5～7は中・下層から出土している。3は須恵器の坏蓋であり, 4・5は, 外面に平行叩きを施した古墳時代初頭の甕, 6は古墳時代前半期の高坏, 7は弥生時代後期中葉の高坏脚裾部である。これらの遺物から, 溝は古墳時代後期の年代が与えられる。

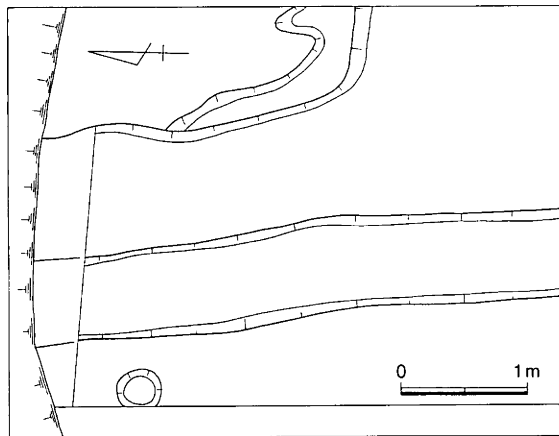
たわみからの出土遺物は8～13で, 8～12は須恵器甕の破片である。8～10が胴部上半, 11, 12が胴部下半の破片と考えられる。土師器11は外面に平行叩きを施した甕の底部で古墳時代初頭のものであるが, 須恵器甕片から, たわみの時期は古墳時代後期と推定される。

14は, 遺構検出中に出土した鞆の羽口の破片である。古代以降の遺物が存在しないことから, 古墳時代後期以前の所産と考えられる。

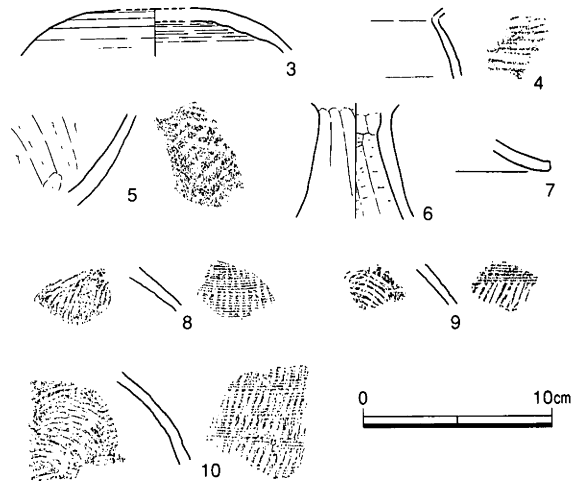
以上, 調査面積が狭小であるため全容は不明であるが, 弥生時代中期～古墳時代後期の遺構の存在が少ないながらも確認できた。 (平井)

(註) 亀山行雄他 2001『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156 岡山県教育委員会

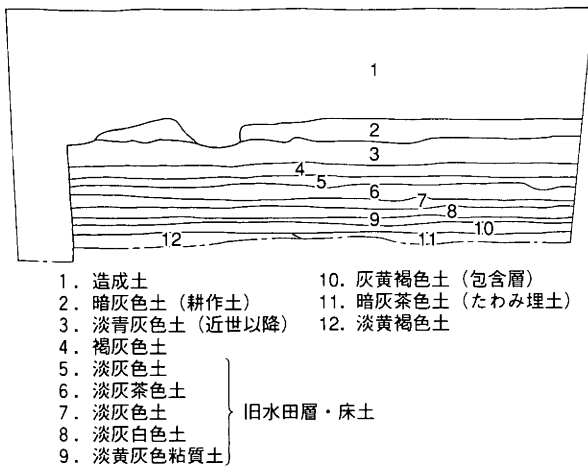
看板設置墳



第28図 遺構配置図 (S=1/60)



L=11.000m



第30図 出土遺物〈2〉(S=1/4)
(14のみS=1/2)

第29図 東壁土層図 (S=1/60)

3. 発掘調査の概要

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 真壁遺跡群

所在地 総社市三輪・真壁地内

調査期間 2004年4月26日～2005年3月31日

調査面積 約5,000㎡

調査概要

(調査経緯)

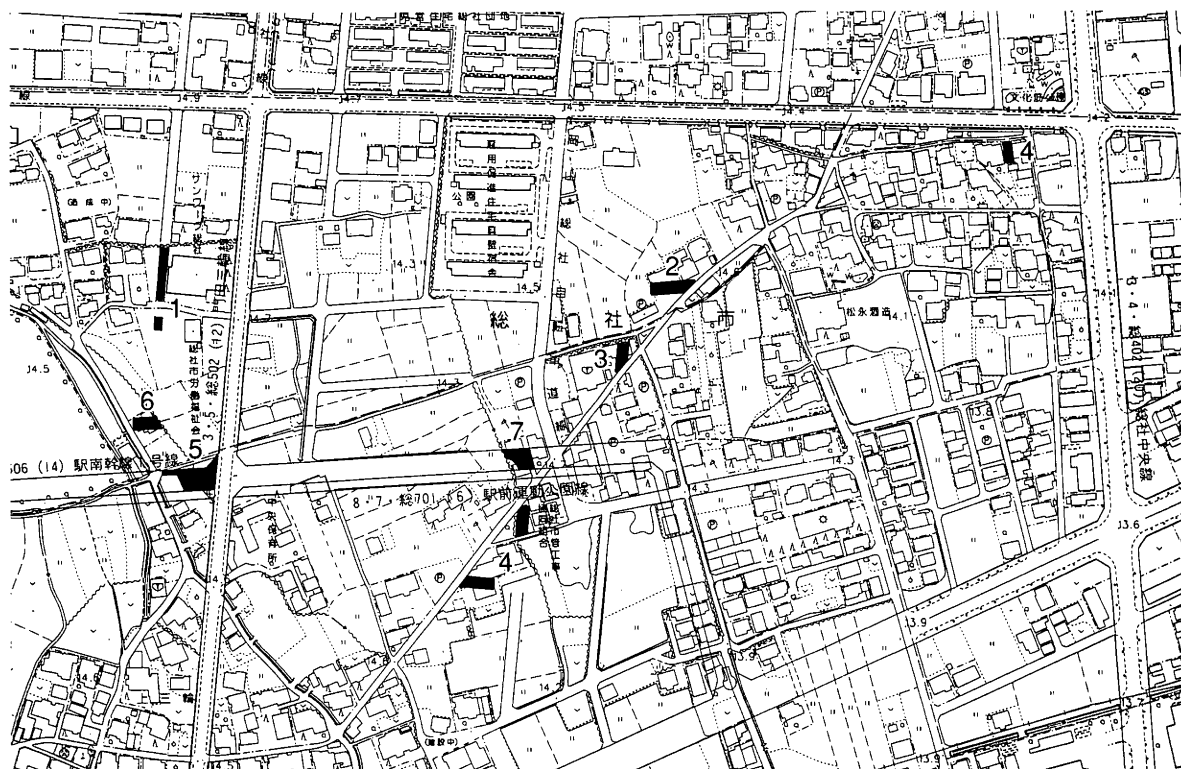
総社駅南部地域を対象とする区画整理事業に伴う2004年度の発掘調査は、例年と同じく、工事工程に合わせながらの調査となったため、地点を変えながら複雑な調査工程となった。

はじめに荒神ケ市遺跡、次いで区画道50号線、区画道32号線、石原遺跡4区、区画道31・58号線、幹線1号1区・1B区、幹線1号2区、幹線1号3区、荒神ケ市遺跡6区、再度幹線1号3区の順で調査を行った。(高橋)

(調査概要)

荒神ケ市遺跡3・5区(1)

昨年度3月末に検出された土器焼成土壌と思しき遺構の調査を引き続き実施した。遺構は長辺約3.1m、短辺2.45m、検出面からの深さ50cmの長方形を呈する土壌である。底面から25cm付近で2段掘りとなる。5層より上層には、南側から廃棄したと考えられる多量の土器が出土している。7層は炭や焼土の混在したやや粘質の強い層であるが、その上面では南西部の一部に被熱面が認められ薄く炭層で覆われていた。最下層である8層は床面に貼ったものと想定される粘土層で、その上面には数点ではあるが焼成破裂土器片が貼りついた状態で出土した^{註1}。この粘土層には焼土塊、炭化物、土器小



第31図 調査地位置図 (S=1/5,000)

片（焼成破裂土器片を含む）などが混在し、全体に被熱したような状況がみとめられることから、前回の焼成時の残骸を含みながら床を貼り直したものではないかと考えられる。

また、北西隅から北辺にかけて、粘土を貼ったと思われる厚さ2～3cmの壁が2段掘り付近まで立ちあがっており、南辺においても一部確認された。これらの壁は黒色を呈し、低温度の熱を受けたものと推定される。

時期は、出土土器から弥生時代末にあたるオノ町式期の所産と考えられる。（平井）

荒神ヶ市遺跡は昨年度から調査を

継続しており、本調査地は、その中でも一番北に位置している。検出された遺構は、住居址3、溝3、土壙13、柱穴34であった。いずれの遺構も削平されて残りが浅く、基盤層の10～20cmから下は礫層となっており、遺構はその中に掘り込まれていた。住-1は古墳時代後期の方形住居址で、弥生時代後期の住-2を切って作られていた。住-3は、少し歪な隅丸方形を呈する古墳時代後期の住居址である。また墓と推定される土壙-8では、弥生時代後期の頸部から上を打ち欠いた壺形土器の上に鉢形土器を被せた状態で埋納されており、壺形土器の中には円礫3が入れられていた。

区画道50号線（2）

2002年度に、区画道32・48号線として調査した地点の東側に隣接する家屋の移転跡地を調査した。微高地上に立地しており、上下2面の遺構面から、柱穴13、土壙3、北東～南西方向の溝7、溝状遺構2等が検出された。基盤層となる微高地は西が高く、東に向かって低く、緩やかに傾斜していた。

区画道32号線（3）

2002年度の調査区の南に位置している。調査地は南北約15m、東西約5.5mと狭小であったが、上下2つの遺構面で遺構が検出された。検出された遺構は、上面で柱穴5、溝3、土壙5であり、下面では調査区のほとんどが、溝の埋土中にあることが判明した。調査区が東西幅5.5mほどと狭かったため、下面の溝の全容については不明である。

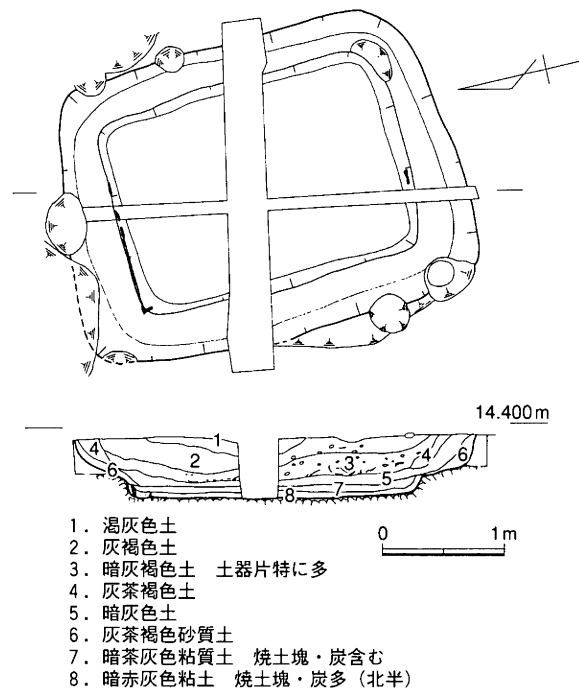
石原6区（4）

江戸時代以降に削平が行われたと推定され、攪乱が多く認められた。また、遺構検出面の上面には、20～30cmの厚さの包含層の堆積があった。検出された遺構は、溝・土壙であった。

石原遺跡V区（5）

溝状の遺構3、近・現代と推定される井戸1のほか近世の墓が検出され、備前焼甕・寛永通宝等が出土した。溝状の遺構も形成された時期は中世以降と推定される。

下川田遺跡（6）



第32図 土壙-7 平・断面図（S=1/50）

上下2つの遺構面が認められた。検出された遺構は、柱穴約300、溝1、溝状遺構1、土壙12であった。10世紀頃と推定される鉢と壺が並んで出土しており、掘り方は検出されなかったが、墓の可能性もある。

惣善寺遺跡（7）

本調査地西側の隣接地は1994・1995年度に調査されており、主として包含層から縄文時代晩期前半の土器とサヌカイト製の石器・剥片等が出土している。今回の調査でも同様の状況が認められ、柱穴約350、土壙28、溝状遺構27等が検出され、縄文時代晩期の土器が多く出土した。また縄文土器の分布の中央付近に80×65×12cmを測る台石状の花崗岩があり、集落内で共同利用されていた可能性が考えられる。 (高橋)

幹線1号3区（鷹尾手遺跡）（8）

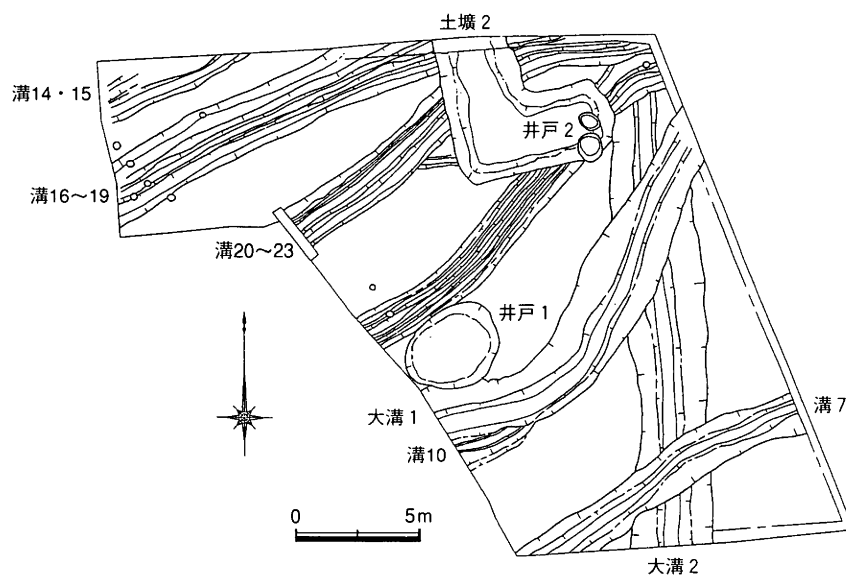
弥生時代前期～古墳時代の溝が大小18条検出された。大溝2以外は北東～南西方向で、地形に沿って掘削された用排水路と想定される。しかし大溝2はそれらの溝とは方向を異にして南北方向に掘削されており、異なる機能が考えられる。その規模も幅3m、深さ1.6mと他の溝をはるかに凌駕し、断面形態もV字形に近い逆台形を呈することから環濠の可能性が想起される。出土遺物も、弥生時代前期末～中期初頭のもので、中部瀬戸内地域で確認されている環濠の時期とも一致する。

古代～中世の遺構としては、井戸、土壙、柱穴、溝等が検出されており、日常的な生活の場と考えられる。2基の井戸は、いずれも曲物を使用した井筒が設置されており、水の浄化を図ったと考えられる小石が内部に敷き詰められていた。また、L字状を呈する土壙2からは「三成」と考えられる線刻^{註2}を施した壺が出土している。「三成」であるならば県南西部に位置する矢掛町東三成に所在した「実成郷→三成郷（みなりのごう）」との関連も想起される。

上記の遺構が掘り込まれた面には縄文時代の遺物を多く含むが、この面の調査は来年度4月より実施するため、詳細は次号の年報で報告したい。 (平井)

註1 田崎博之氏のご教示による。

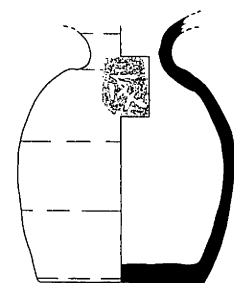
註2 狩野久氏のご教示による。「三成」の可能性が高いとのことである。



第33図 幹線1号3区（鷹尾手遺跡）遺構配置図（S=1/300）



(S=1/2)



第34図 土壙-2出土壺 (S=1/4)

平成16年度 鬼城山発掘調査の概要

所在地 総社市奥坂1762-2, 奥坂1763-1

調査期間 平成16年4月19日～7月29日

調査面積 90㎡

調査概要

鬼ノ城では城域の南西部、特に角楼から第2水門までの城壁線が、史跡整備に伴う発掘調査により確定している。これまでの発掘成果を振り返ると平成8、9年度に西門と角楼が発見され、平成10年度には西門の全面調査によって、城門の全容がほぼ明らかになると共に、以後の整備計画の立案に向け大きな整備候補地となった。こうした調査成果を受け、通常の城壁線についても平成13年度に高石垣から第2水門までを発掘調査し、直線を単位に構築された版築土塁の構造や折れの検出によりかなりの精度で形状や規模が明らかになった。また、平成12年度に策定された「史跡鬼城山環境整備基本計画」に基づき、角楼から第0水門周辺までが復元整備地区に設定され、平成14年度以降は整備工事に先行しながら随時、立会調査や発掘調査を実施することになった。

平成16年度の発掘調査は貯水池に対する基礎資料が皆無であることから、復元整備地区と最も近接し、来跡者にも視覚的に表示が可能な第1水門貯水池を調査対象とし、第20回鬼城山整備委員会（平成16年2月26日）において検討していただいた。調査の途中ではあったが、諸先生方には第21回鬼城山整備委員会（平成16年6月3日）の現地指導の際に、足下の悪いなか発掘現場をご視察いただき、懇切丁寧なご指導をいただいた。

この貯水池は谷筋により第1水門と繋がっており、当然のことながら保水や余分排水の関係上、第1水門と連動している。発掘調査を実施する前に下草刈り清掃を行い周辺地形の観察を行ったところ、貯水池は瓢箪形を呈し、池の北東方向が相対的に低位で、第1水門方面から入り込んだ谷部と接しており、池から谷頭までには細長い流路が看取できた。

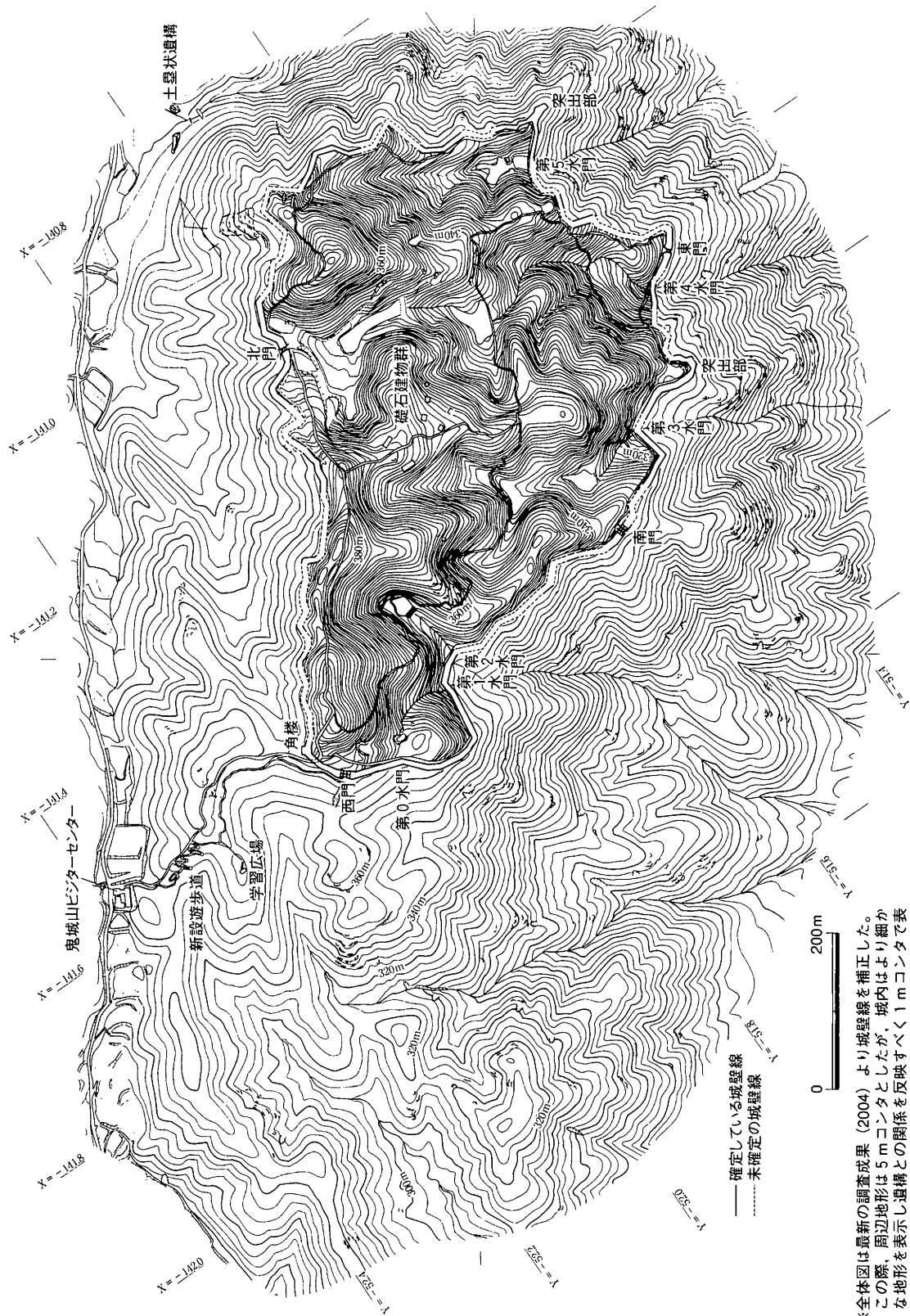
発掘調査はまず貯水池の長軸側にトレンチを1本設定し、堆積状況や規模の概要を調べることにした。トレンチ内に貯水池の両肩を検出し、底部が平坦に削平されている状況を確認したため、貯水池の形状に合わせて順次、拡張を行った。調査の結果、貯水池の東半には平面がU字形となる池の肩を検出し、底部の状況が面的に観察できた。

また、予備調査として鬼ノ城の北側に位置する土塁状遺構について確認調査を実施した。1971年に鬼ノ城を発見された高橋護氏は「鬼城山・築地山」の論考（註1）において、池の下に所在する土塁を水城状遺構に比定し、さらに鬼ノ城の背面に位置する土塁状遺構を、鬼ノ城関連の土塁として紹介されるなど鬼ノ城発見直後の黎明期において、刮目すべき評価をされている。

そのため、土塁状遺構が鬼ノ城を理解する上でも重要な遺構と認識されることから、小規模ながら確認調査を実施することにした。

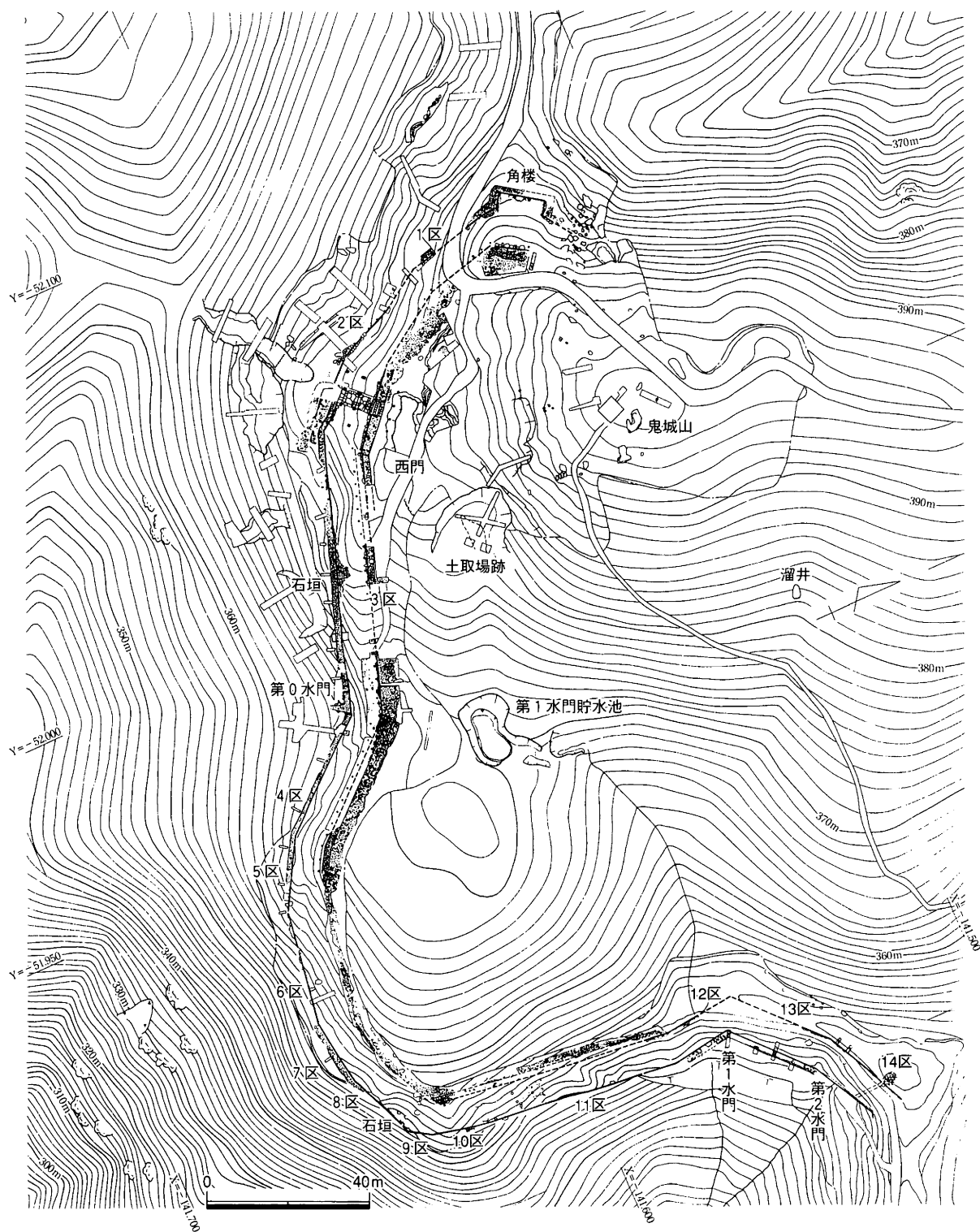
土塁状遺構は総社市奥坂1762-2に所在し、城外である鬼ノ城北側の山裾に位置する。岩屋方面から流走する血吸川の支流は当該箇所でも合流するが、この合流地点には川を挟んだ南北の両岸に山塊が迫り、狭隘な溪谷が間近に迫っている。

両岸の山裾には土塁状遺構が南北に存在し、特に南側（鬼城山側）の遺構は、分断されて断面が三角形となり、山裾に向かって長さ20mも延びている状況が確認できる。こうした遺構の性格を追求す



第35図 鬼ノ城全体図 (S = 1/8,000)

※全体図は最新の調査成果(2004)より城壁線を補正した。この際、周辺地形は5mコンタタとしたが、城内はより細かい地形を表示し遺構との関係を反映すべく1mコンタタで表示している。



第36図 第1水門貯水池位置図 (S=1/1,500)

るため、周辺地形の詳細測量と断面観察を主としてトレンチを1本設定した。

調査の結果、二カ所に存在する土塁状遺構が一連の遺構であることが判明し、水平方向に突き固められた盛土の検出により、人工の土木構造物であることが改めて明らかになった。しかしながら、遺構の時期や性格については確証を得るには至らなかった。

註1 高橋護「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117, 1976年



第37図 土塁状遺構 平・断面図 (S=1/400)

し尿処理場（浄化園）増築に伴う発掘調査(2)

遺跡名 窪木薬師遺跡

所在地 総社市窪木薬師

調査期間 平成16年3月25日～7月31日

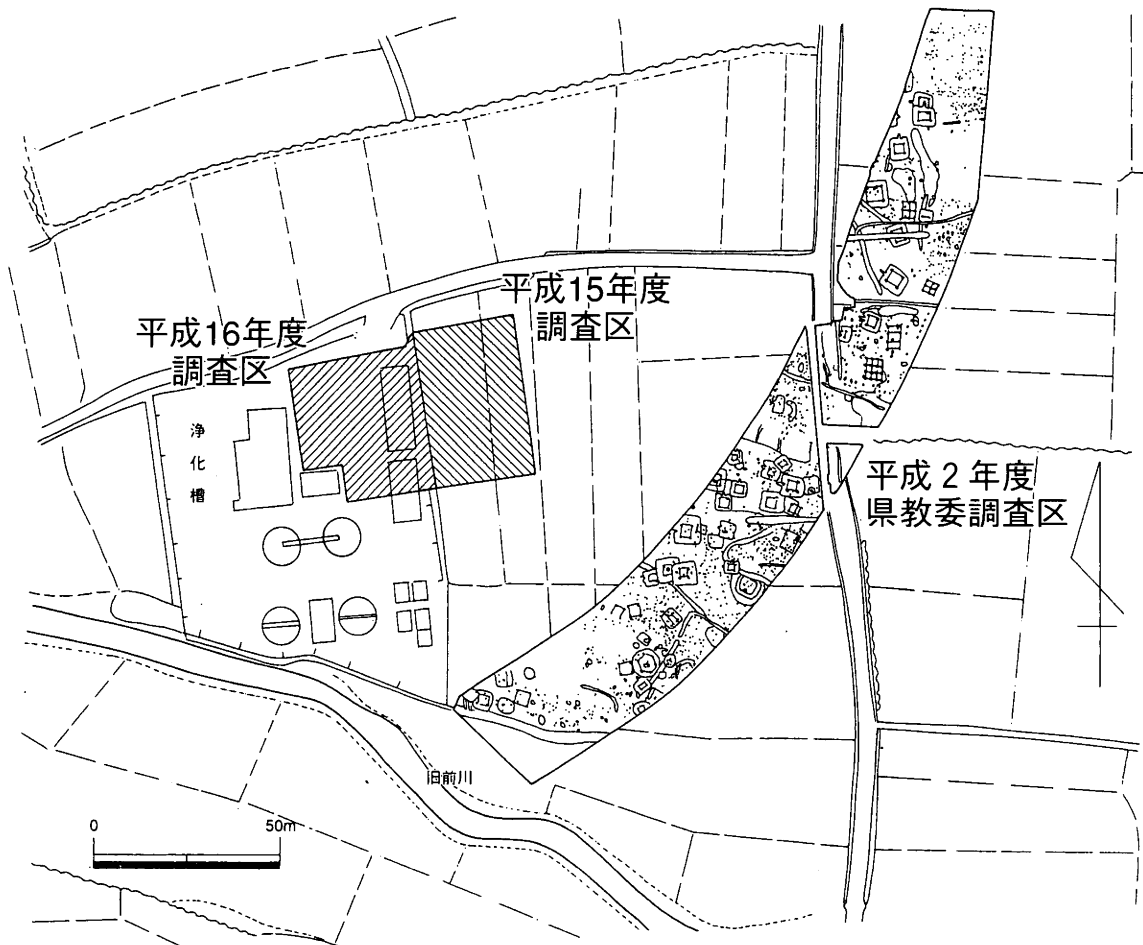
調査面積 900㎡

調査概要

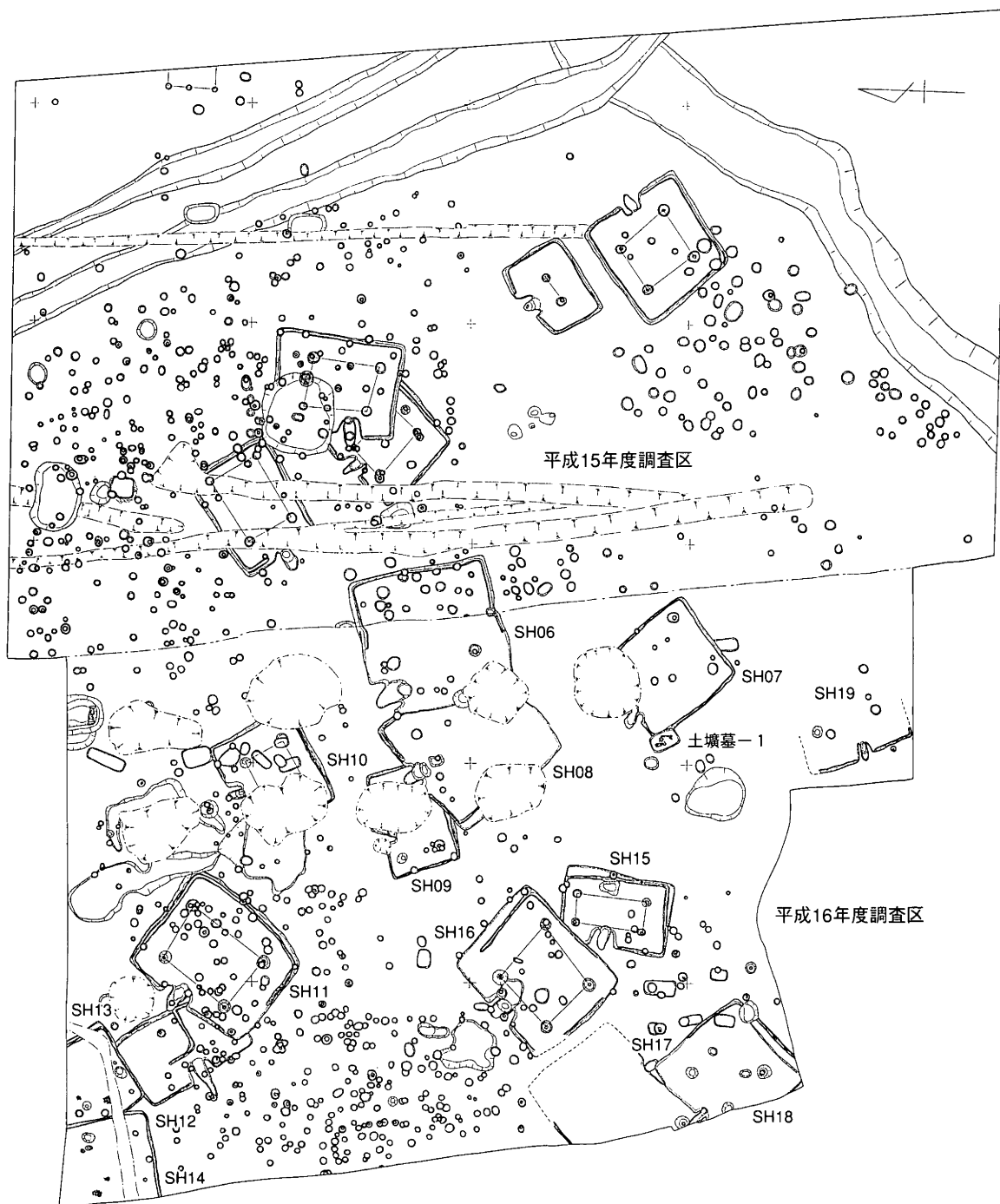
今年度のし尿処理場増築に伴う窪木薬師遺跡の発掘調査は、前年度に引き続き建物建築予定範囲の西側半分を対象に実施した。調査対象地には稼働中のし尿処理施設の管理棟等が残っていたため、その移設工事終了後に重機による造成土除去を開始した。

調査対象地は処理場建設以前は水田であり、旧所有者の話では周囲よりやや高く、よく乾燥する水田であったことから一帯は「岡」と呼ばれており、現在の処理場が位置する周辺が安定した微高地であったことが予想される。この東に緩やかに下降する微高地の状態を反映して、調査区西端の近世水田の鋤床層の高さは前年度の調査区に較べて40cm以上高い。このため水利の利便のための地下げによる遺構の削平が顕著で、調査区西端の柱穴は深さ10cm程度しか残存していない。

発掘調査は、造成土と建物地中杭を除去した後に人力で精査を行い遺構の検出を行ったが、建物地中杭による攪乱や近世の水溜による土壌のグライ化により検出は困難を極めた。



第38図 平成16年度調査区位置図 (S=1/2,000)



第39図 遺構配置図 (S=1/300)

遺構は前年度の調査区と同様に、部分的に残る薄い中世包含層を除去した段階ではほぼ同一面で古墳時代から中世までの遺構が重複した状態で検出できた。

中世の遺構では土壙墓・土壙と多数の柱穴が確認されたが(第29図)、柱穴は大半が調査区の西半分集中し、東半分には南北方向にほぼ一直線に並んだ状態で土壙墓と骨蔵器埋納土壙が検出された。

土壙墓の形態・規模と副葬品は一様ではなく、土壙墓-1からは屈葬された人骨と青磁・白磁の椀・皿が良好な状態で検出された他、骨蔵器埋納土壙からは、須恵質の壺を囲むように大量の土師器の坏と小皿が詰められた状態で出土した。

これらの土壙墓は時期的には柱穴群と同様に13世紀中頃～末葉に継続して営まれたものであるが、柱穴が疎らな区画に意図的に配置されている点と、副葬品に格差がみられることから集落内の階層差

を反映した共同墓地であったと考えられる。

古墳時代の遺構は、5世紀末葉～6世紀末葉の住居址が13軒と土壙状炭窯2基が確認されたが、その在り方は微高地の中心部である点を反映して前年度の調査区に較べて密度が高い。

竪穴住居はいずれも造り付けのカマドを備えており、その主軸方向は北西が大半を占めるものの、南東や南西方向に主軸を取るカマドも存在している。いずれの住居址も床面上からの遺物の出土が少ないため厳密な時期の特定は難しい。その中で、カマドに甑が掛けられて出土したSH15や、床面上から完形の須恵器が出土したSH09は、ほぼ同時期の5世紀末葉の所産で、やや小型の住居である点は共通しているが主軸方向は異なっており、カマドの方向と住居の時期の関係は見出し難い。

また、前年度の調査区で確認された鍛冶炉は今回の調査区には存在せず、鍛冶関連遺構としては土壙状炭窯2基のみである。この傾向は、集落のより中心部である点と関係する可能性があるが、窪木薬師遺跡の微高地利用の在り方等は県教委の調査区と併せて本報告中で検討していきたい。今回のし尿処理場増築に伴う発掘調査は、採取した土壌の洗浄も含めて7月末日に終了した。(武田)



第17図版 調査区遠景（北から）



第18図版 遺構検出状況



第19図版 SH15・SH16全景（南から）



第20図版 土壙墓一1

国府川改修工事に伴う発掘調査(1)

遺跡名 御所遺跡
所在地 総社市金井戸
調査期間 平成16年12月1日～平成17年3月31日
調査面積 480㎡
調査概要

御所遺跡は市内東部の金井戸に所在する。以前からこの金井戸地区では、諸先学により国道180号線北側の御所宮を中心とする「御所」一帯が律令期の備中国府の有力な候補地として提唱されており、国道沿いには地元有志により「備中国府跡」の石碑が建立されている。

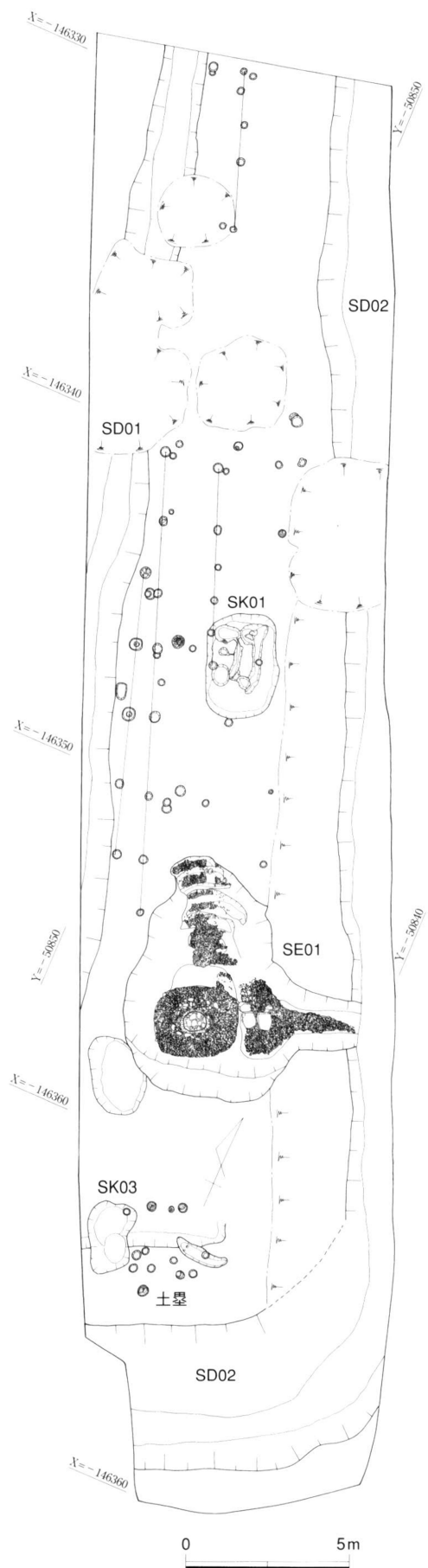
国府川は堰井堰で高梁川より取水した十二個郷用水と、三須丘陵北縁沿いに東流する前川を南北に結ぶ小規模河川であるが、川幅が狭小で屈曲しているため増水時には度々氾濫し周囲の田畑が繰り返し冠水してきた。このため、総社市土木課では地元の要請を受け、下流の前川改修終了後に十二個郷用水と共に改修を計画し、平成16年度に国道より北側上流部の工事に着手することが決定した。

また、すでに平成15年度より国府川に掛かる国道橋梁の架け替え工事も着手されており、橋梁基礎周辺の護岸部分の工事も進行していた。

この橋梁工事に伴う埋蔵文化財の確認調査^{注(1)}は県教育委員会文化財課が実施し、遺物の散布は認められるが橋梁上流の今回の調査区域に隣接する一帯は低湿地で、遺構は認められないと判断した。



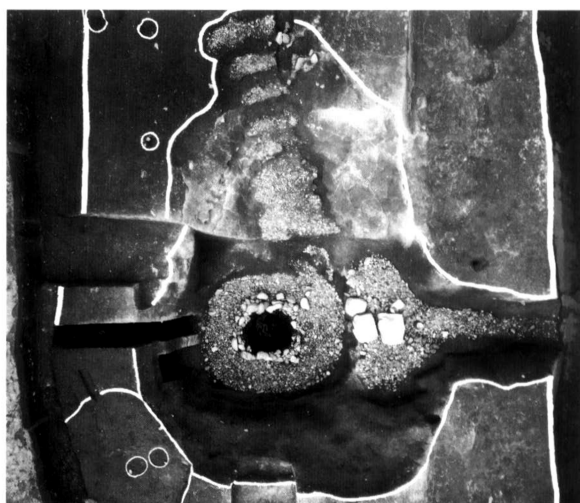
第40図 調査位置図 (S=1/10,000)



第41図 御所遺跡遺構配置図 (S=1/200)



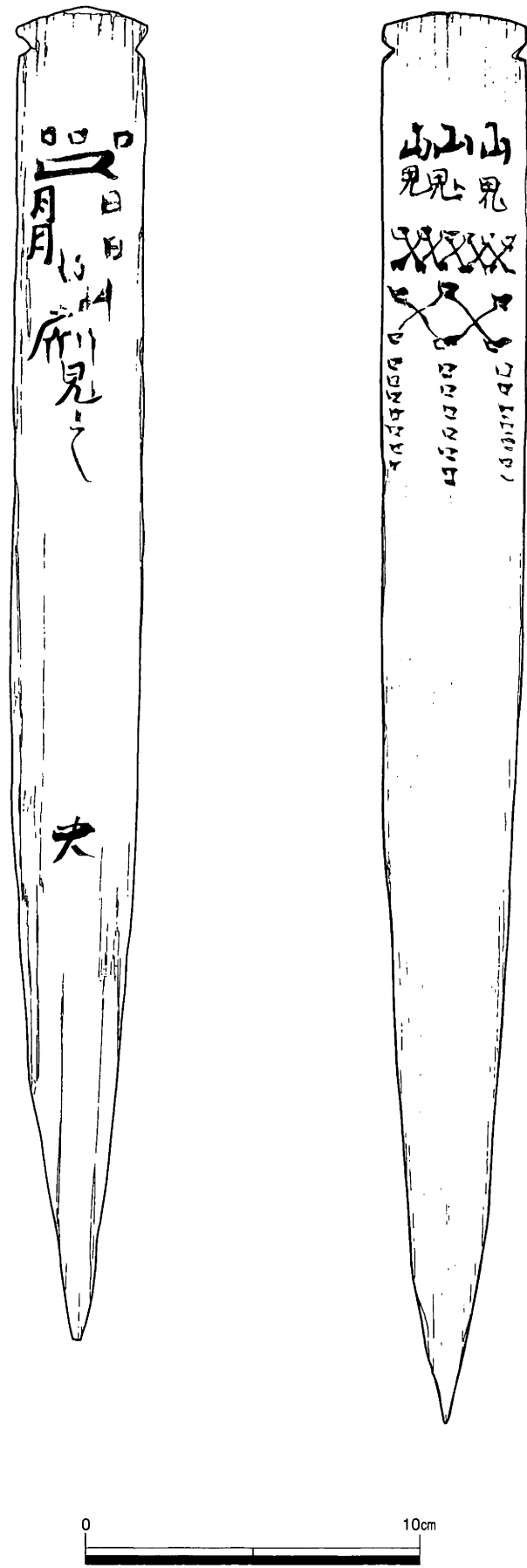
第21図版 調査区全景



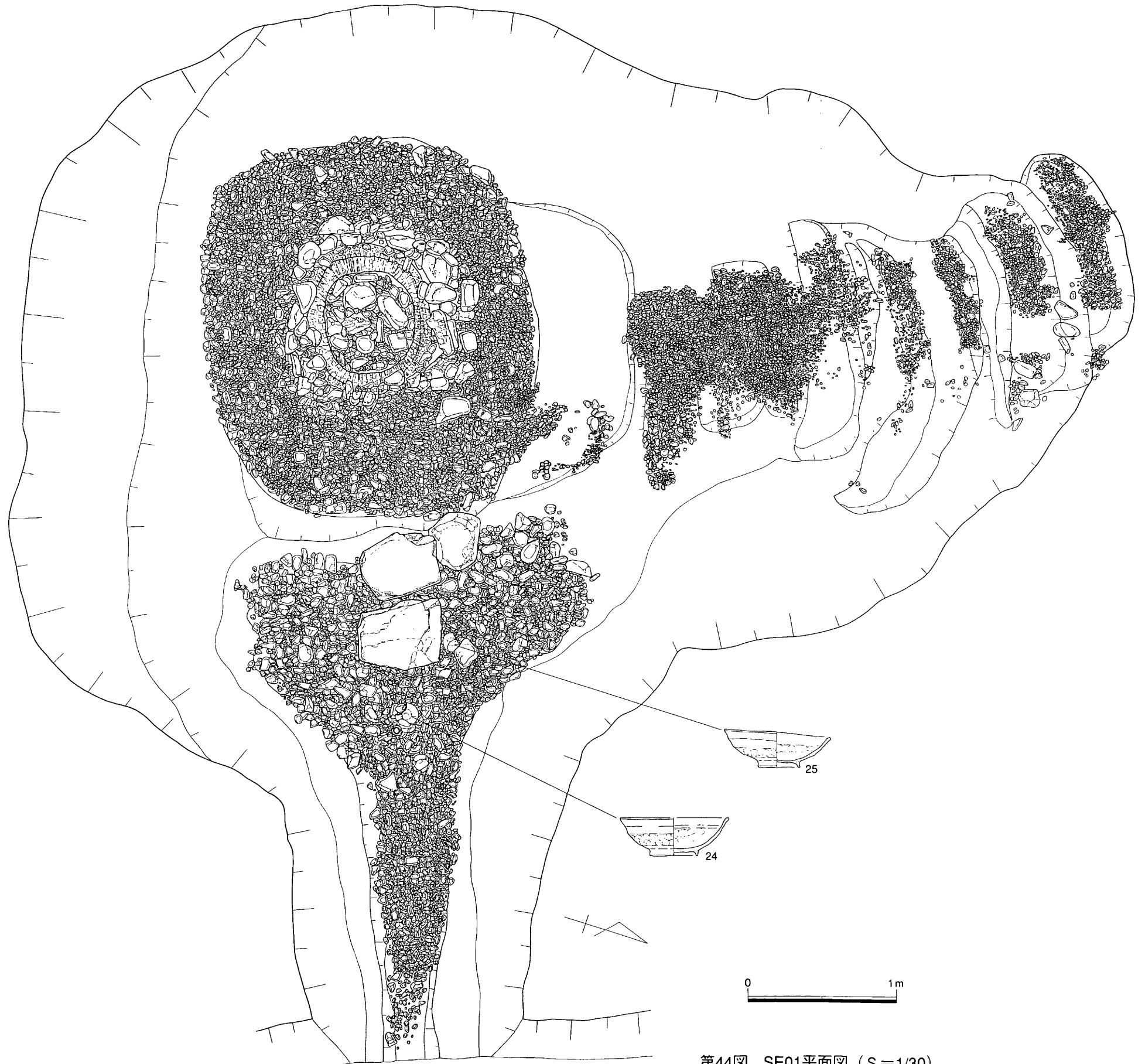
第22図版 SE01全景



第42図 梵鐘鑄造土壙 (SK01) 平面図 (S=1/40)



第43図 御所遺跡 (SE01) 出土呪符木簡 (S=1/2)



第44図 SE01平面図 (S=1/30)

市教育委員会では、平成16年10月に河川改修部分について重機による確認調査を実施したが、担当した職員によると調査地点は微高地の端部で遺構・遺物は希薄であり前述の県教育委員会の所見とも符合するとした。ただ、工事掘削予定部分の一部が微高地である点と若干の遺物包含層が存在することから、12月1日より2週間の予定で発掘調査を開始した。

発掘調査は、重機により1 m以上の造成土を除去した後に人力で近世水田面から精査し、同時に東西方向のトレンチ2本を設定して土層の堆積状態の観察を行った。

この結果、調査区の南端周辺で基盤層に垂直に掘り込まれた落ち込みの肩部を確認したためトレンチを拡張して掘り下げ、深さ約1.6mで礫が敷かれた底面を検出した。

さらに拡張したところ、攪乱のため平面では検出できなかった落ち込みが、直径約6 mの円形の井戸(SE01)(第44図)であり、東へ伸びる礫敷の排水路も存在することが判明した。

また、礫敷の底面には直径1.2mの大木をくり抜いた井戸枠が設置され、その埋土中からは東西に向き合う形で2点の呪符木簡(第43図)が立てられた状態で出土し、井戸の廃棄にあたり祭祀が行われたとみられる。さらに、緩斜面となっている井戸堀方の北側には基盤層を整形した砂利敷の11段の階段も検出され、通常の給水を目的とした井戸とは用途が異なる非常に大規模で、類例をみない特殊な構造の井戸であることが明らかになった。

埋土の土層観察からSE01は人為的に短期間で埋め戻されたとみられ、炭・焼土混じりの埋土中より大量の土器・瓦・鉄滓(第45図)が出土したが、井戸自体の廃絶時期は礫上から出土した土師器椀(第45図24・25)から推定して12世紀後半と考えられる。

SE01の北側では、梵鐘の鑄造土壙(SK01)と溶解炉を据えつけた基底部とみられる焼け締まった面が検出され、残存する深さ30cm程度の土壙の埋土からは、焼土に混じって梵鐘の鑄型片が出土した。

調査区の南端では、調査区東端に沿い現在の国府川の流路を踏襲して掘られた南北方向の大溝(SD02)が東西方向にほぼ直角に屈曲する状態が明らかになった。(第41図)

微高地を掘削した東西方向の溝は幅約5 m、深さ約1.2mで、内側には基底部の幅約2.5 m、残存する高さ30cm程度の土壘とみられる高まりが検出された。(第48図)

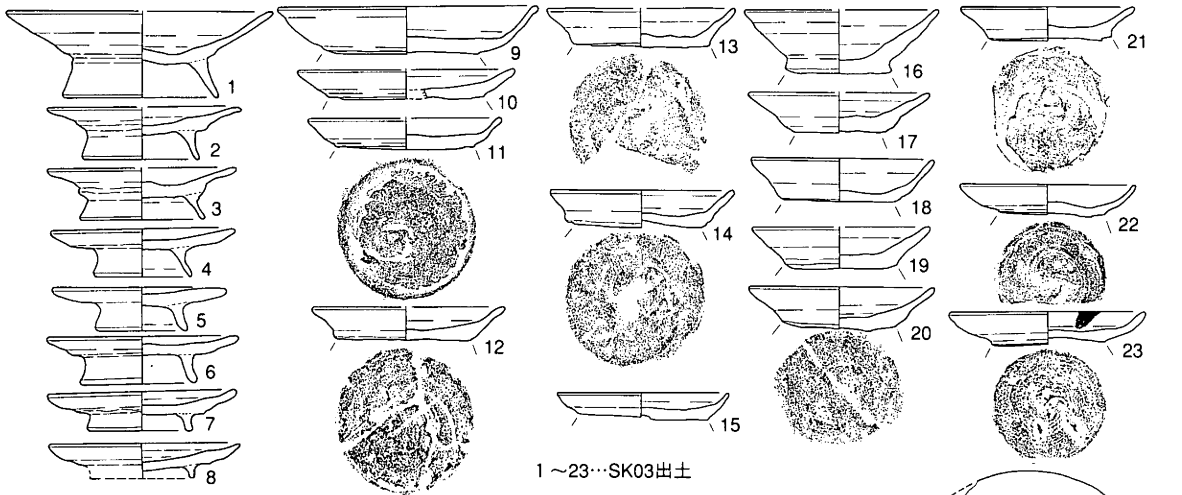
この東西方向の大溝とは対照的に南北方向の大溝は現在の国府川にほぼ重複すると推定されるため正確な規模は不明で、今回の調査区では地山を整形した肩部の一部を確認できたのみであるが、南辺で確認された土壘は残存する土層を観察した限りでは存在しない可能性が高い。(第48図)

この大溝は、平成17年度に引き続き実施した調査で、今回の調査の屈曲点から約120mの地点で微高地を掘削した大溝がほぼ直角に西に曲がること確認された。このことから今回の調査地点は、現時点では南北辺の規模は不明であるが、東辺が約120mの大溝に囲まれた方形居館の東南隅から東端に位置すると推定され、調査区西側の御所宮一帯がその中心であることが明らかになった。

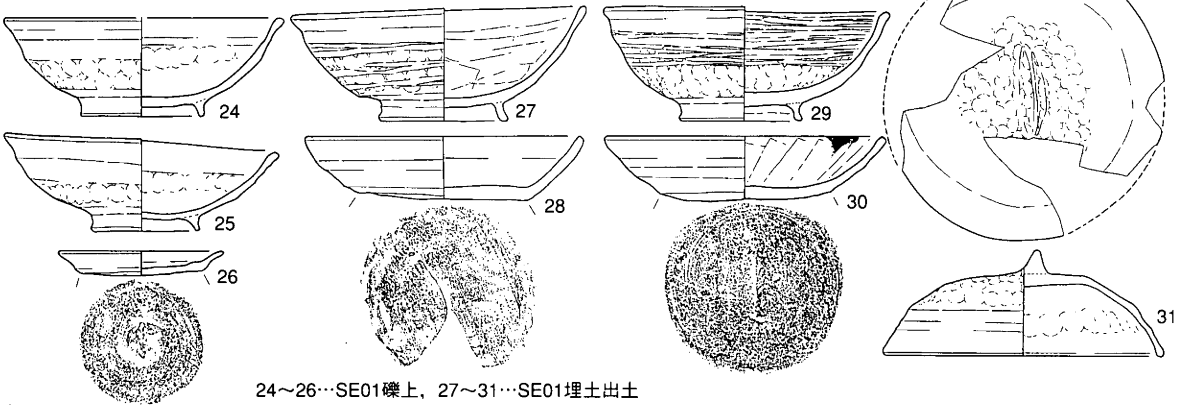
この大溝の内側には井戸と梵鐘鑄造土壙の他に、大溝とほぼ平行して掘られた溝(SD01)や柵列とみられる柱穴(第41図)が検出されたが、いずれも11～12世紀代の土器を大量に包含した造成土に掘り込まれている点から12世紀後半の遺構と考えられる。

今回の発掘調査でその存在の一端が明らかになった大規模な居館跡が存在する砂質の暗黄色土基盤層には、微高地端部の斜面堆積とみられる弥生～古墳時代の土器がまとまって含まれることから、この微高地には安定した集落が営まれていたと予想される。

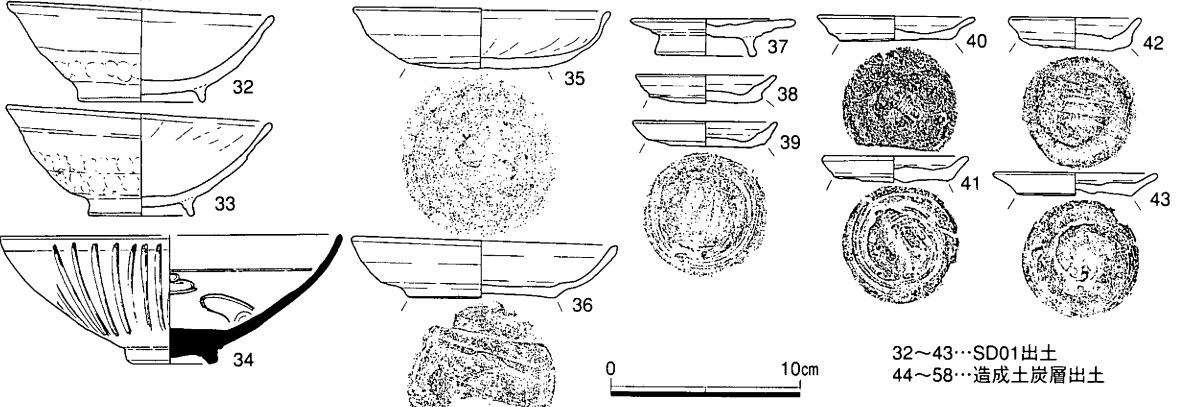
しかし、7～10世紀の遺物は皆無であり、下層の土壙(SK03)や包含層から出土した防長産緑釉



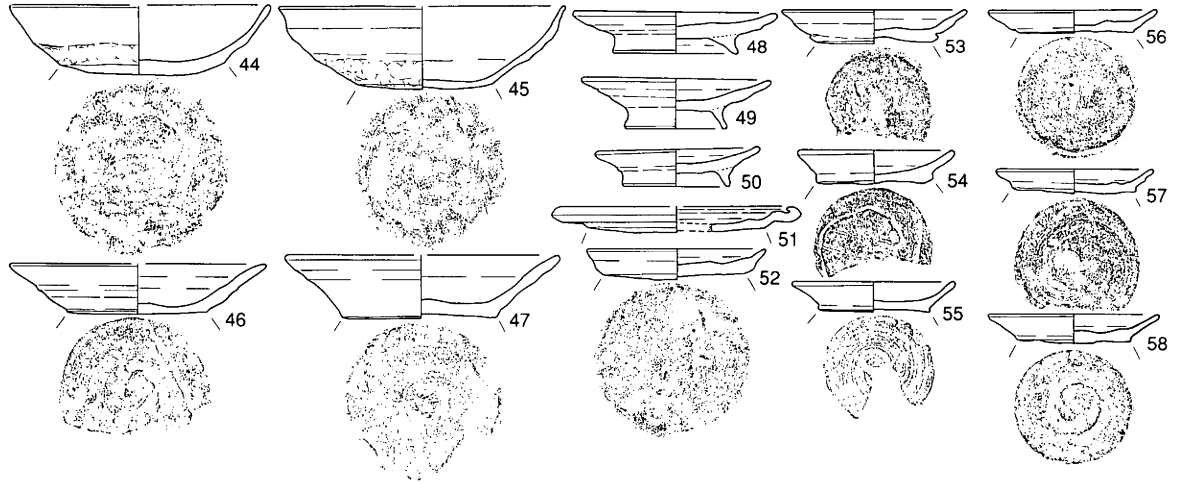
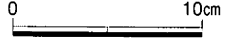
1~23...SK03出土



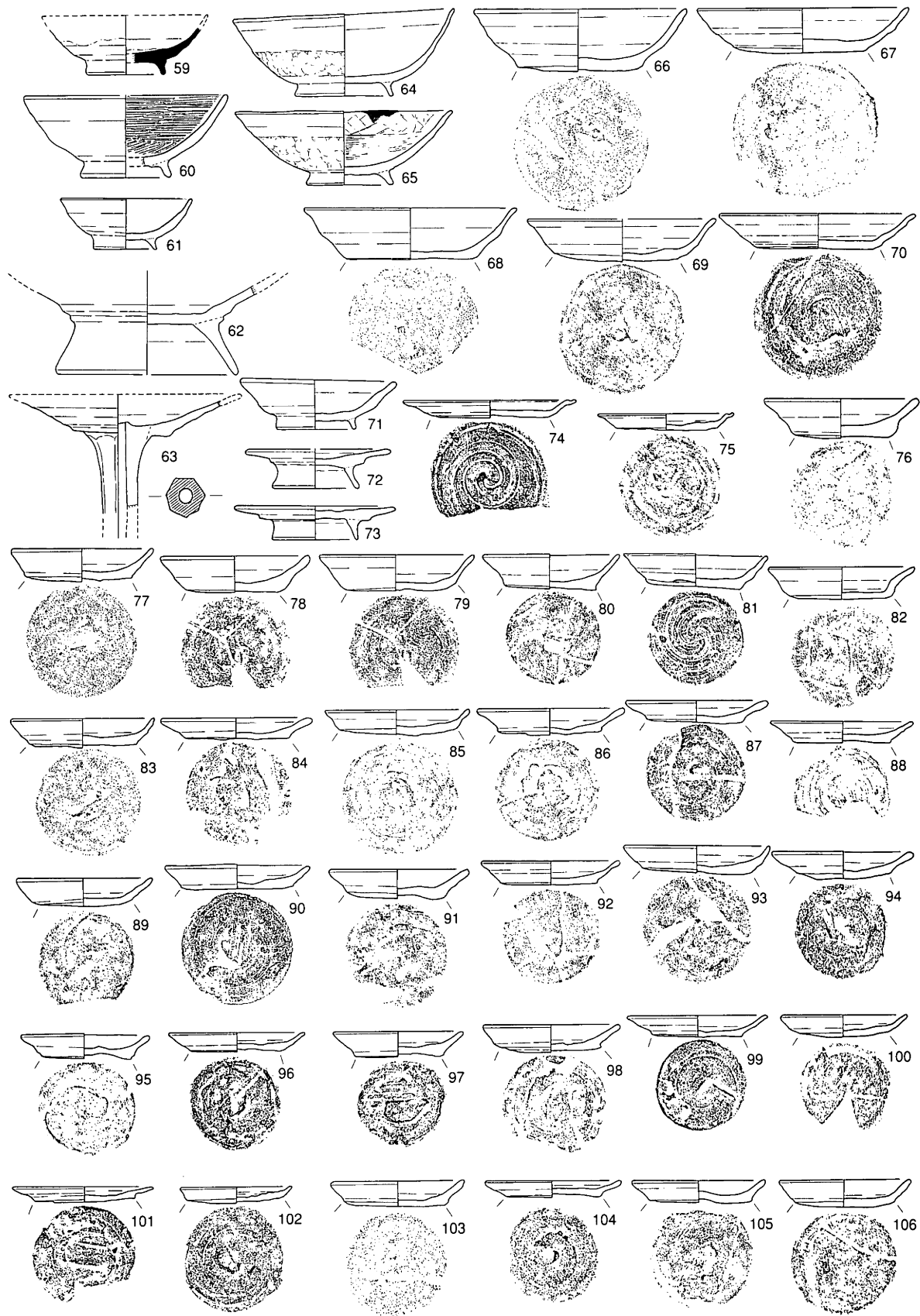
24~26...SE01礎上, 27~31...SE01埋土出土



32~43...SD01出土
44~58...造成土炭層出土



第45図 御所遺跡出土遺物(1) (S=1/4)

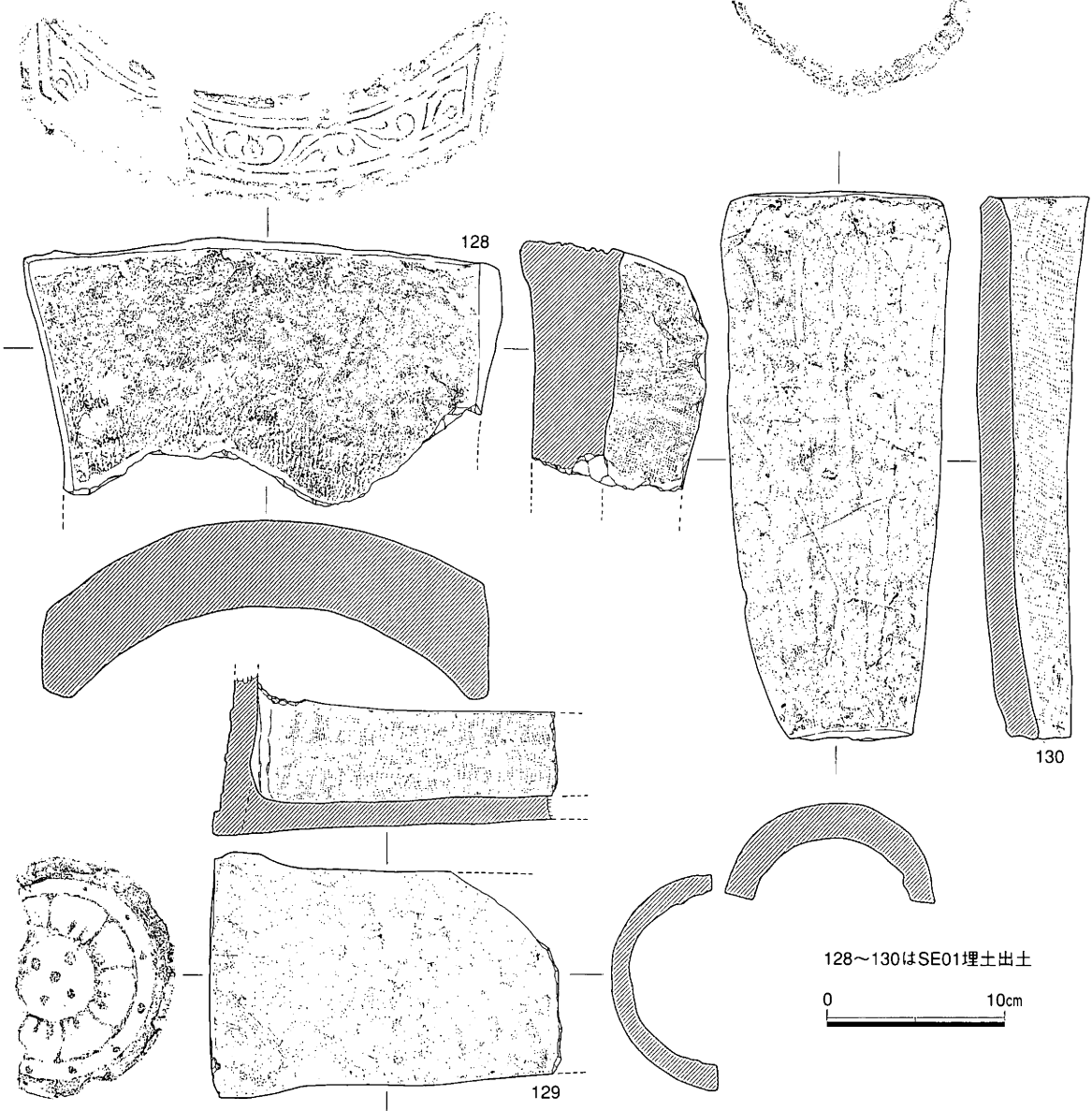
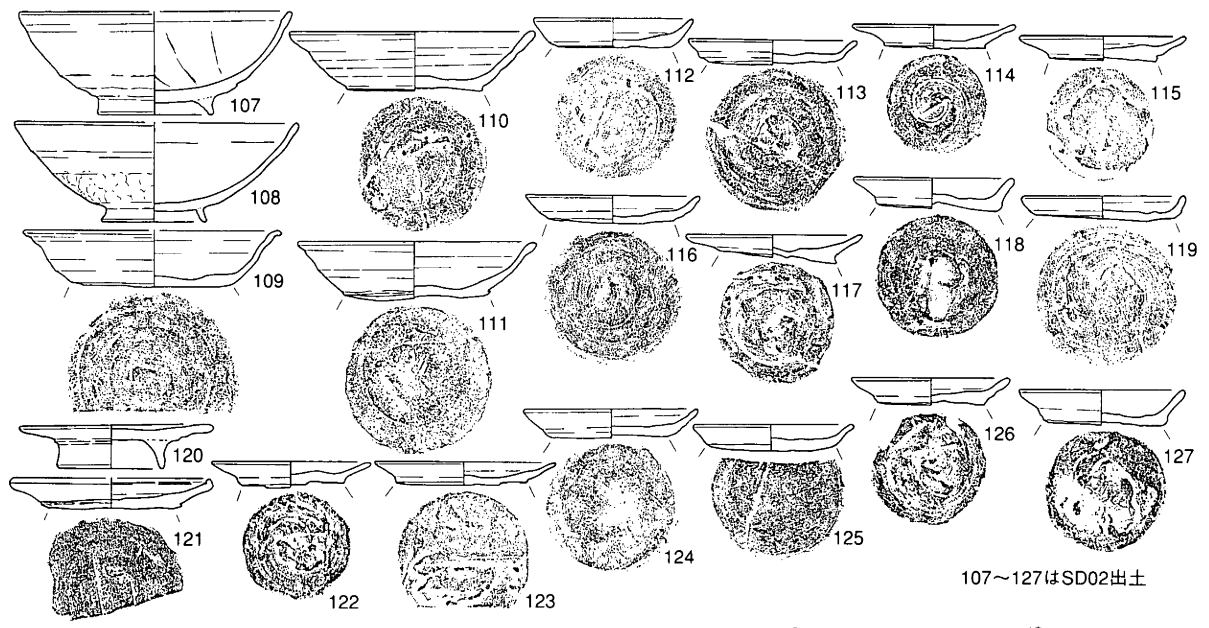


59は灰釉陶器
60・61は黒色土器

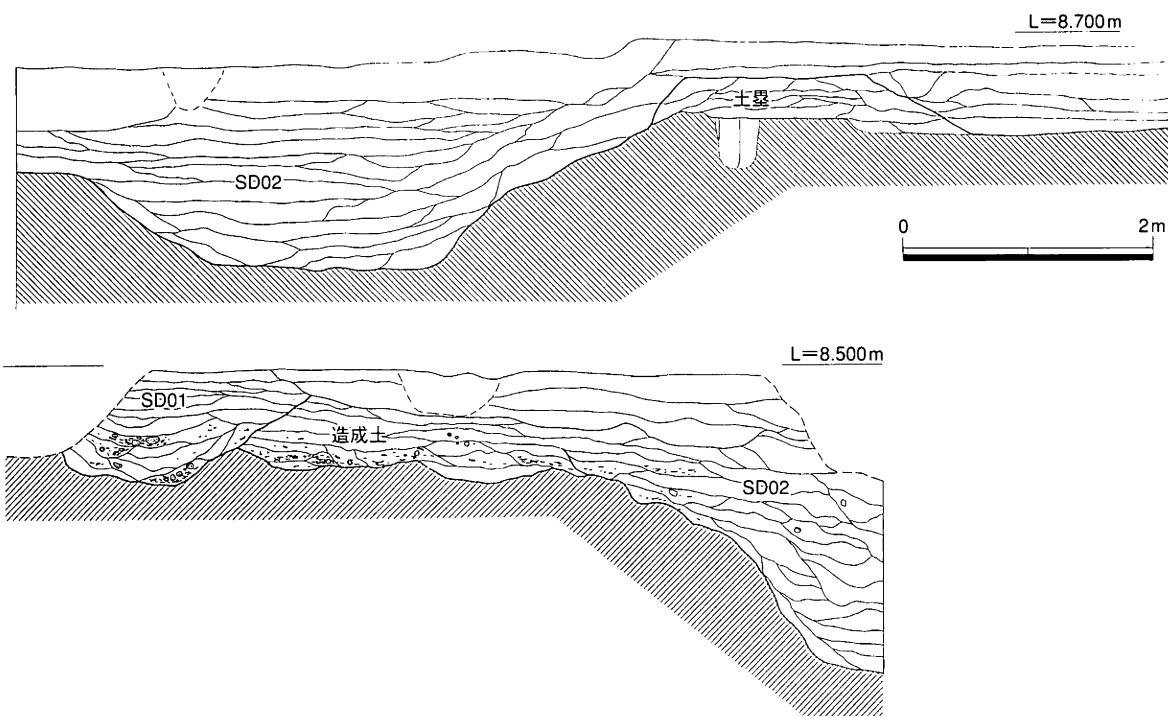
59~106は造成土下層出土



第46図 御所遺跡出土遺物(2) (S=1/4)



第47図 御所遺跡出土遺物(3) (S=1/4)



第48図 SD01・02断面図 (S=1/60)

陶器・灰釉陶器，黒色土器・土師器等から，居館は11世紀前半に新たに造営され，土師器の下限の年代からみて12世紀後半には井戸を含めて他の遺構も廃絶したと考えられる。

これらの遺構の性格についてみると，先ず居館の外郭の溝は東辺は低湿地を利用しているが，南北辺には微高地を掘削した大規模な溝を設け南辺にはさらに土塁を築いており，単なる区画の溝ではなく中世城館に類似した防御性を重視した構造である点が特色として挙げられる。

また，井戸 (SE01) はその構造・規模からみて単なる給水用ではなく，特別な儀式用に築造された可能性が高く，この居館が単に有力な在地領主の生活の場ではなく政治的な儀礼の空間であったことを示している。さらに出土する土器の器形の種類が鍋・甕等の調理具・貯蔵具が非常に少なく，大半が土師器の椀・杯・皿等の供膳具に限られ，意図的に破砕され大量に投棄された状態で出土する点も共食儀礼を伴った宴会が繰り返し行われた政治的中枢部であったことを想定させる。

御所遺跡が所在する金井戸地区は平安後期には賀夜郡服部郷に比定されており，近接する阿宗郷・刑部郷・久米郷と共に国衙領であったことが記されている。一般的に平安後期から中世は荘園制社会といわれているが，依然として国衙領も高い割合で残っていたと考えられており，備中国府の推定地である当遺跡周辺に集中して国衙領が存在する点は注目される。

また，13世紀末葉に作成された『備中国賀夜郡服部郷図』に記された田名には「国領」・「御服所」・「細工所」・「御厩田」・「検非違所」が記載されており，国衙が直接支配した直営田畠や付属機関の費用に充当する田畠が服部郷内に存在していたと考えられている。

以上の発掘調査の所見と文献資料から考えて，御所遺跡で発見された大規模な居館は平安後期の備中国府である可能性が極めて高いと思われる。この結論については，平成17年度に引き続いて実施した上流部の調査で明らかになった遺構・遺物からも肯定できるものだが，さらに平成18年度には内部の確認調査の実施も予定しており，調査が進行した段階で再度検討したい。(武田恭彰)

註 (1) 岡山県埋蔵文化財調査報告 30「金井戸天神遺跡」2005 岡山県教育委員会

幼稚園園舎増築工事に伴う発掘調査

遺跡名 宮ノ内遺跡

所在地 総社二丁目字宮ノ内718 719 716 714-1

調査期間 2004年9月14日～10月15日

調査面積 約250㎡

調査に至る経緯

総社駅から東へ約1.4km、総社市街地中心部に位置する総社幼稚園において、保育園を併設するために園舎の増築が計画された。増築部分は、地表面から深さ130cmの基礎を周囲に配し、深さ125cmの地中梁で繋ぐものである。

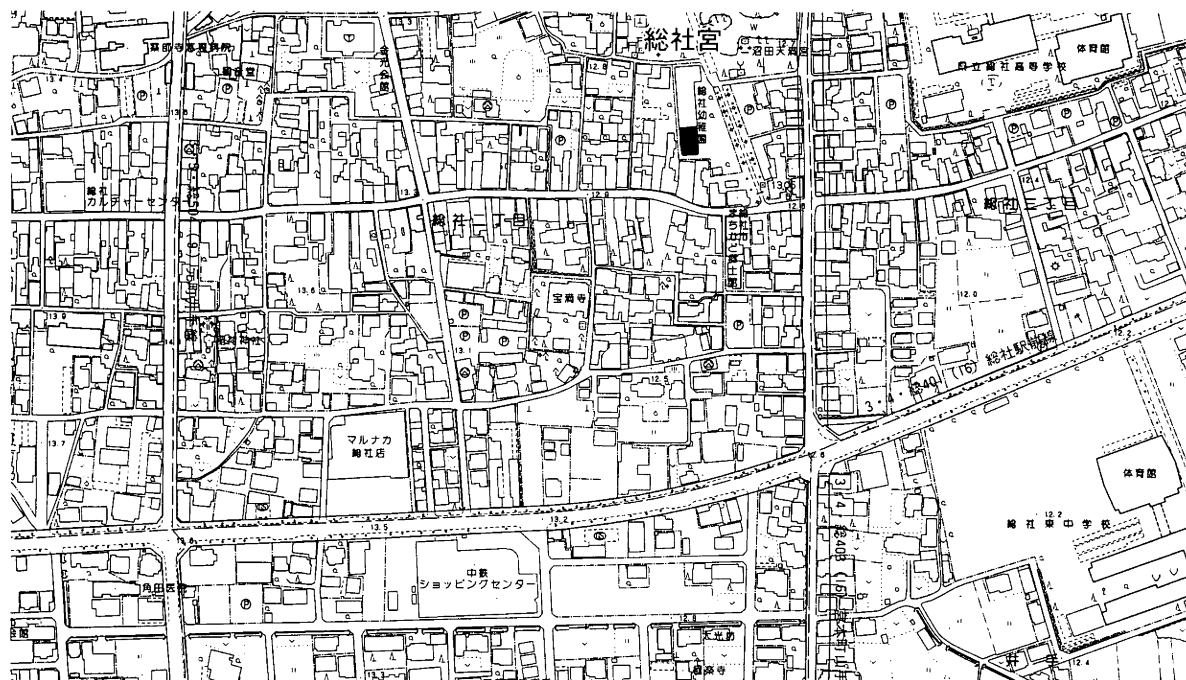
総社幼稚園は総社宮に南接し、国府関連遺跡の存在も想定される重要な地域に位置するが、総社宮から国道180号線を挟んだ北側は、病院の増築工事に伴う立会調査で、低位部に当たるとということが判明している^註。しかしながら市街地中心部において旧地形の復元は困難であるため、事前に試掘調査を実施し、遺構が存在する場合は全面発掘調査を実施することとした。

9月14日、重機による試掘調査を実施した結果、遺構が検出されたため、引き続き造成土等を剥ぎ、翌15日から発掘調査に入った。

調査概要

基本的な層序は、80cm前後の造成土直下に部分的に15cm程度の包含層が認められ、その下層には灰茶褐色土の自然層が、さらに下層は灰茶褐色砂質土層が堆積する。近世以降の遺構は包含層を切り込んで存在するが、この面では明確なプランは捉えにくい。中世以前の遺構は、包含層を除去した自然層上面で検出された。

調査区内は、近世～現代の攪乱によって大きく破壊されており、遺構の残存状況は極めて劣悪であ



第49図 調査地位置図 (S=1/5,000)

った。また、造成以前に地下げにあっているものと考えられ、検出された遺構も浅いものが多い。

残存していた遺構としては、そのほとんどが柱穴であり、礎石をもつものも認められる。これらの柱穴の中には、近世以降の所産と考えられるものも多く、また、破壊が大きく及んでいるため、建物等の復元は困難であった。その他の遺構としては、土壇、溝などが検出された。

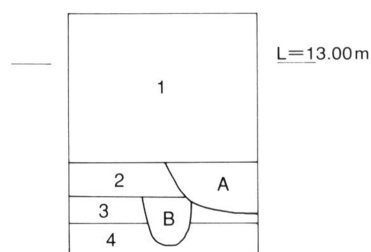
これらの遺構のほとんどは、古代末～中世と考えられ、その他の時期のものとしては、弥生時代中期後半の土壇、古墳時代初頭の土壇が僅かに認められたにすぎない。

以上述べたように、出土遺構は弥生時代中期、古墳時代初頭のを若干含むものの、そのほとんどは平安時代末～中世にかけてのものである。遺構が大きく破壊されているとはいえ、遺物も平安時代前半や奈良時代にまで遡るものは認められないことから、当該地周辺に古い時期の国府関連施設があった可能性は少ないものと考えられる。 (平井)

註 平井典子2001「長野病院別棟新築工事に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』10 総社市教育委員会



第50図 遺構配置図 (S=1/200)

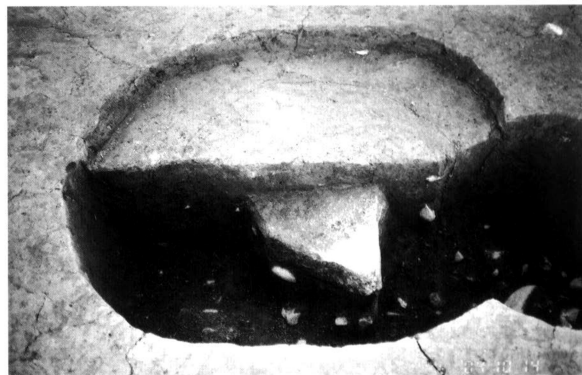


- 1. 造成土
- 2. 灰茶色土 (包含層)
- 3. 灰茶褐色土 (自然堆積層)
- 4. 灰茶褐色砂質土 (自然堆積層)
- A. 近世以降の攪乱
- B. 古代末～中世の遺構

第51図 土層模式図 (S=1/40)



第23図版 完掘状況 (北東から)



第24図版 柱穴半掘状況 (北から)

平成16年度 水内ほ場整備事業にともなう発掘調査概要

遺跡名 薬師堂上遺跡、薬師堂下遺跡

調査期間 平成16年11月～平成17年1月

調査面積 約2,000㎡

調査概要

(調査経緯)

平成16年度の水内地区ほ場整備事業は滝山川左岸の段丘上と、高梁川とによる氾濫原が対象地となった。事業地内には、周知遺跡は所在していないものの、北側の尾根上には若水山古墳群（市指定史跡）や水内古城跡が、滝山川右岸の段丘上では散布地が確認されており、事業に先立って試掘調査を実施した。その結果、段丘上の端部において遺構・遺物が検出されたため、引き続いて発掘調査を実施した。

(遺構・遺物)

薬師堂下遺跡からは、竪穴住居が検出されたほかは、ピット群と溝、谷状の落ち込みであり、遺構密度はそれほど高くない。住居は中央に炉穴をもった円形であり、2軒が大きく重なり、かつ1軒は数度の建替えが認められている。さらには、住居を巡るように柱穴が数多く検出されており、これも住居の主柱として壁帯溝まで掘平された結果であると推測した。



第25図版 薬師堂下遺跡 竪穴住居

薬師堂上遺跡からは、明瞭な遺構は少なく、落ち込みや、溝あるいは自然流路といったものであった。調査区の南側は氾濫原へ移行する斜面であることから、遺跡の主体は北側の丘陵裾部と思われる。

出土した遺物は、未洗浄であるため、調査時の判断によると、弥生～中世の土器が出土している。しかし、量的にはそれほど多くなく、斜面堆積からの出土がほとんどである。遺構にともなっては、薬師堂下遺跡の竪穴住居や溝が弥生時代中期～古墳時代前期と推測されるが、詳細は遺物整理の結果を待ちたい。また、薬師堂上遺跡からは奈良～平安ごろの須恵器が出土しており、水内荘の関わりが考えられるものであろうか。

(まとめ)

今年度の事業範囲は、わずかに段丘上を含む程度で、ほのほとんどが高梁川による氾濫原にある。高梁川右岸に沿った集落（山本・河原地・市場）と調査区のある段丘との間には、旧河道が推定され、試掘調査では川礫・砂や、洪水砂あるいは沼地といった状況が捉えられた。また河原地集落の立地する自然堤防上に近いところでは褐色系の包含層が認められ、おそらく中世以降に自然堤防上にて集落が営まれたものと思われるが事業範囲外であり、詳細は不明。

段丘上の調査では、薬師堂下遺跡で住居が検出され、集落が営まれていたことがわかった。しかし、わずか数軒であることから、集落の本体は調査区の北から西側にかけて立地しているものと推測される。さらに西側で実施されたほ場整備事業内では遺跡の確認がなされておらず、おそらく弥生時代中期よりはじまり若水山古墳群・高田古墳群を築くまでにいたった集落であると考えられる。また、薬師堂上遺跡では住居は検出されていないものの、片山古墳群がこの背後の丘陵上に築かれており、調

真壁遺跡（中央四丁目地点）の発掘調査概要

遺跡名 真壁遺跡

調査期間 平成16年11月10日～11月20日

調査面積 約164㎡

調査概要

（調査経緯）

調査は、商業店舗の建築にともなって、文化財の所在確認を行ったことによる事前審査である。

調査地は、その用地南に接する都市計画道路の建設にともなって遺跡の発掘調査が実施され、また、予定地の西側部分でも区画整理事業において発掘調査が実施されている。おもに中世の掘立柱建物群と弥生時代の溝群・土壙墓が検出されている。^註

このことから予定地は真壁遺跡地内に該当するものであり、遺跡の取り扱いについて協議を行った。できるかぎり地下への影響のないような工法や建築設計、あるいは建物を西側に配置するなどの提案をし、その結果、土壌改良は建物全面ではなく柱状として、柱間の地中梁は盛土～現表土内に収めることとなり、この柱部分を除き現状保存となった。さらに西側部分での調査結果があることから、現状保存できる建物部分全体での発掘調査を行う必要はないものと判断され、柱状改良の行われる柱部分のみにおいて、記録保存のための調査を実施することとした。

（遺構・遺物）

トレンチは、建物の側柱、計18本の柱部分に設定した。しかし、1.2×1.2、1.5×2ないし1.2×2.4mと小規模であったことから、明瞭な遺構の検出はわずかであり、出土した遺物も少なかった。

耕作土の下は20cm程度の土層が認められる。灰色と黄褐色の混ざるもので、区画整理事業にともなう造成土と判断される。

この造成土の下に、旧耕作・床土の認められるT-11～16と、円礫ないし円礫混じりのシルト層となるT-18・1～3、黄褐色シルト層となるT-4～10・17がある。この土層の違いは、円礫層の高まりが調査地の南側にあり、北に向かって下降して、水田層が形成されたことを示している。

また、T-11～16の旧床土の下には、マンガンの沈殿が多い暗茶褐色シルト層が認められ、さらに下にT-4～10・17と同じ黄褐色シルト層がつづく。この暗茶褐色シルトが水田層あるいは包含層になるものと判断される。

主な遺構は、T-8で柱穴と土坑、T-7で溝ないし落ち込み、T-6で溝、T-1・15で落ち込みである。遺物はほとんどともなっていない。わずかに縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器の小片であり、遺構の時期を弥生から中世と判断した。

（まとめ）

調査範囲が、柱部分の18箇所、各調査面積が1.4～3㎡と小規模であることから、検出できた遺構・遺物はわずかである。西側部分での調査結果から予想される掘立柱建物群の検出は調査面積的に不可能であり、T-7で溝のつづきと思われるものが確認できた

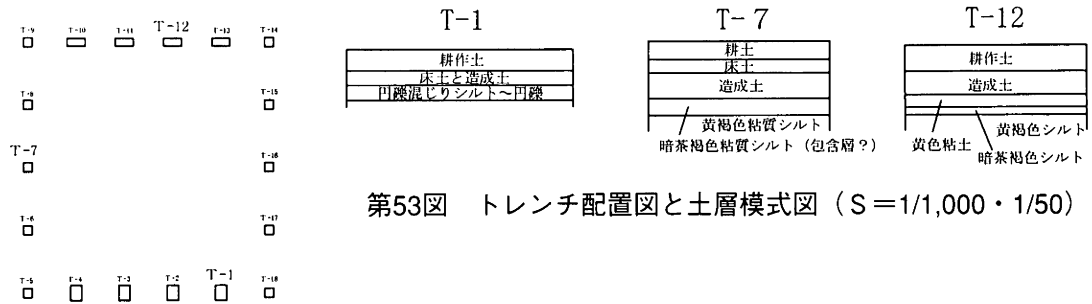


第26図版 T-8（東から）

にすぎない。

全体的にみて、今回の調査地は南に礫層の高まりが存在し、北に向かって下降、その堆積過程の中で水田層の形成が行われたものと推測される。水田層は弥生時代～中世にかけて営まれ、西側の中世の掘立柱建物群の集落域と、本調査地の可耕域とが検出できたという調査成果が得られた。（前角）

註 「1 真壁遺跡」『総社市史 考古資料編』1987年



第53図 トレンチ配置図と土層模式図 (S=1/1,000・1/50)



第54図 調査地位置図 (S=1/5,000)

共同住宅建設に伴う発掘調査

遺跡名 金井戸新田遺跡

所在地 井手字往地1180-4, 1180-1

調査期間 2005年3月1日・3月7日～3月10日

調査面積 約200㎡

調査に至る経緯

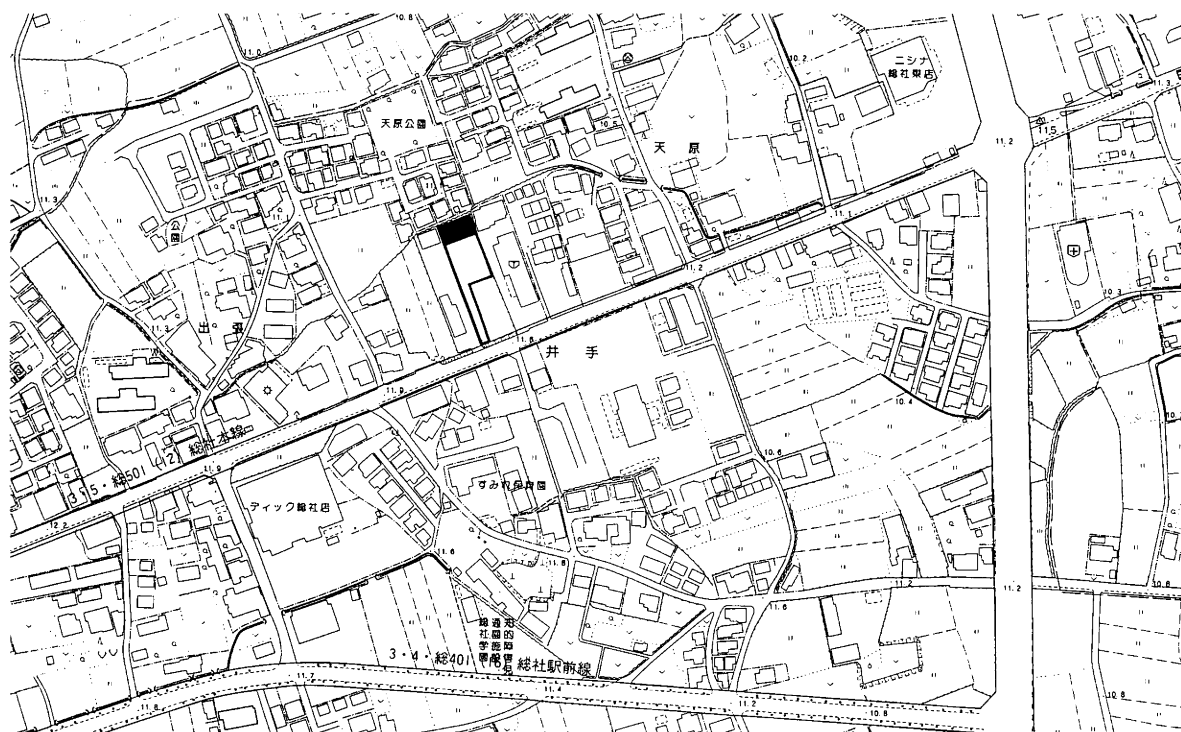
総社市市街地の東部、国道180号線の北側に共同住宅の建設が計画された。現状は水田跡が荒地となっているが、ボーリング調査の結果地盤が脆弱であることが判明し、建物部分を地表面から約70cmまでの深さで全面地盤改良する予定となっていた。

建設予定地の北約300mの地点には、古墳時代初頭の住居址6軒と12世紀後半の建物1棟等が検出された金井戸新田遺跡^註が所在する。当該地にも遺跡が広がる可能性は極めて高く、表層改良によって破壊されるおそれがあることから、事前に試掘調査を行い、遺構が検出されたなら発掘調査を実施することとした。

試掘調査は3月1日に実施し、工事に携わっていた重機の協力を得た。その結果遺構が確認できたため、引き続き表土および床土の除去作業に入ったが、翌日は雨天のため、実際の発掘調査は次週の月曜日3月7日から行なった。

調査概要

基本層序は、20～30cmの真砂土による造成土の下層に、さらに2～7cm程度の客土が置かれている。その下層においては現代水田の耕土はすでに除去されているが、近世と想定される水田層が2層部分的に残存していた。その下層にあたる5層は遺物を若干含む暗灰褐色土の包含層、6層は灰茶褐色土



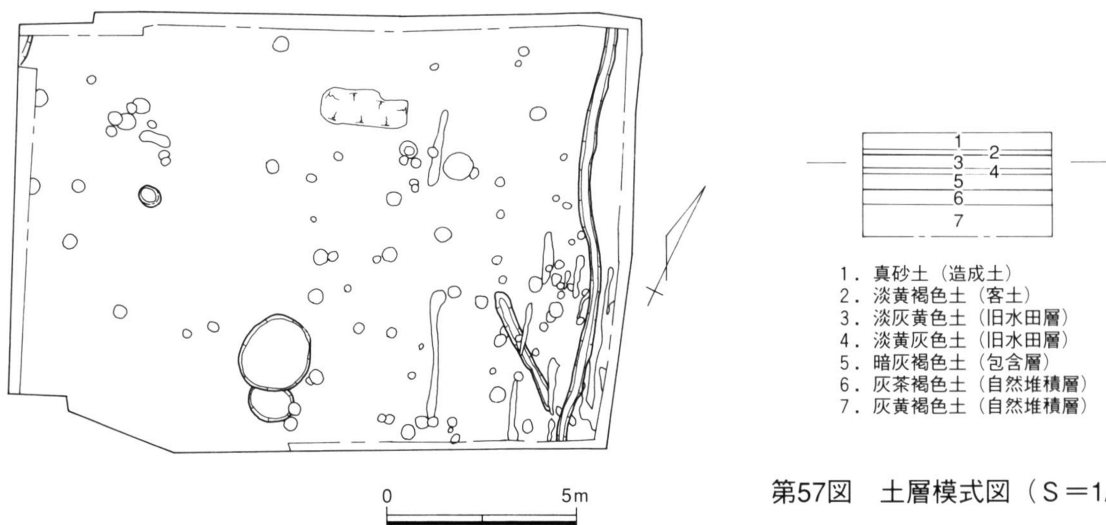
第55図 調査地位置図 (S=1/5,000)

の自然堆積層で、遺構はこの層の上面から切り込まれている。7層は灰黄褐色土であるが部分的にグライ化しており青みを帯びる箇所がある。6, 7層には流れ込みの遺物等も皆無であった。

遺構としては、調査区の東西両端に南北方向に掘削された幅約30cm、深さ約15cmの溝2条が検出された。埋土の状況や、図化は不可能であるが出土した土器の小片からいずれも古墳時代の所産と推定される。また、出土遺物がほとんどないため時期は不明であるが、柱穴、土壇がみられる他、調査区の東側に近世以降と考えられる南北方向の溝状遺構がみられる。総じて遺構は少なく、遺物も僅少で、弥生時代中期および古墳時代の土器が若干認められるにすぎない。

以上、遺構は浅く遺存状態が悪いことなどから、後世の地下げにより失われた遺構が存在する可能性もあるが、遺物がほとんどみられないため、当初より遺構密度は低く、集落でも縁辺部に位置したものと推定される。(平井)

註 高橋進一1994「金井戸新田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』3 総社市教育委員会

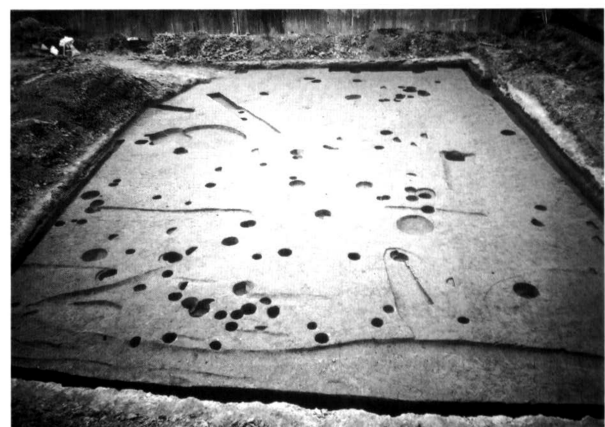


第56図 遺構配置図 (S=1/200)

第57図 土層模式図 (S=1/40)



第27図版 調査地遠景 (南西から)



第28図版 完掘状況 (東から)

4. 史跡整備事業の概要

平成16年度 鬼城山環境整備事業

1 事業経過

鬼城山環境整備事業の整備基本計画は平成5年度に設置した「鬼城山整備委員会」と文化庁、岡山県教育委員会の指導を受け、平成12年度で策定した。この計画では全体整備期間をおおむね10年間とした。第1期事業は当初4年間で、西門復元を含め復元地区で事業を進めることとした。

平成13年度に新設園路、学習広場、高石垣整備などを実施し、平成14・15年度では主に西門復元整備を行い、平成15・16年度で角楼表示整備を実施した。

また平成16年5月には平成15年10月に完成した版築土塁が長雨で崩落したため、原因解明を目的に崩落土撤去と科学調査を行い、この部分の土塁復元は次年度以降とした。

2 平成16年度整備事業概要

(1) 角楼表示

平成15年度に整備した角楼上面に床を設け転落防止の手すりを設置した。角楼は城背面側の防御施設と考えられるが、土塁上の構造は不明であり、建物の復元ができないため土塁保護と活用を考慮した床表示を実施した。床材は復元ではないため防腐処理した杉材を使用した。

(2) 土塁復元

角楼両側の土塁においては、土木の専門家の指導も受け工法の変更をおこなった。それはトレンチ穴等を利用しコンクリートブロックを設置し、これに発泡ウレタンを巻き盛土の軽量化を図り、表面と上面に版築層を構築する工法である。

版築層の構築には当初、硬化剤等を配合せず現場土のみで構築した。しかし現場土の粒径は細砂以下が主体で含水率が高くなると脆弱であることから、今回の施工では石灰7%を混ぜるものと白セメント3%を混入するものの二種類を角楼両側で構築した。

土塁復元は平成15年度に西門・角楼の復元及び表示の主要部分が完成したため、この両施設の間で開始した。土塁の復元にあたっては、内部を現場発泡ウレタンとし次年度で表面及び上面を版築とすることとした。盛土内部は地山と盛土とのせん断抵抗をとるため地山にロックボルトを打ち、さらにこのボルトに金アミを取り付け発泡ウレタンとの定着を図り軽量化もおこなった。この工法は盛土崩落の要因である盛土の過重を減らすこととせん断抵抗を設けることを目的とした。

(3) 板塀表示

角楼両側の土塁の上面に板塀の表示として高さ110cmの塀を設置した。角楼石段部分は横板が無いと考えられることから、柱表示のみとした。施工範囲は柱穴を検出した柱7間分である。

(4) 園路造成

新設園路は駐車場から西門へ通じるもので、平成13年度で角楼までが完成していた。今年度は角楼から西門にかけての園路を新たに造成し、平成17年度で透水性舗装を施すこととした。

(5) ガイダンス施設建設

施設は平成15年度で敷地を造成し、平成16年度で展示棟・トイレを建築した。鬼城山には水道施設がないため、井戸水を得るためのボーリング調査を実施した。また、トイレの水は環境に配慮し、循環して利用できる構造の浄化槽を採用した。

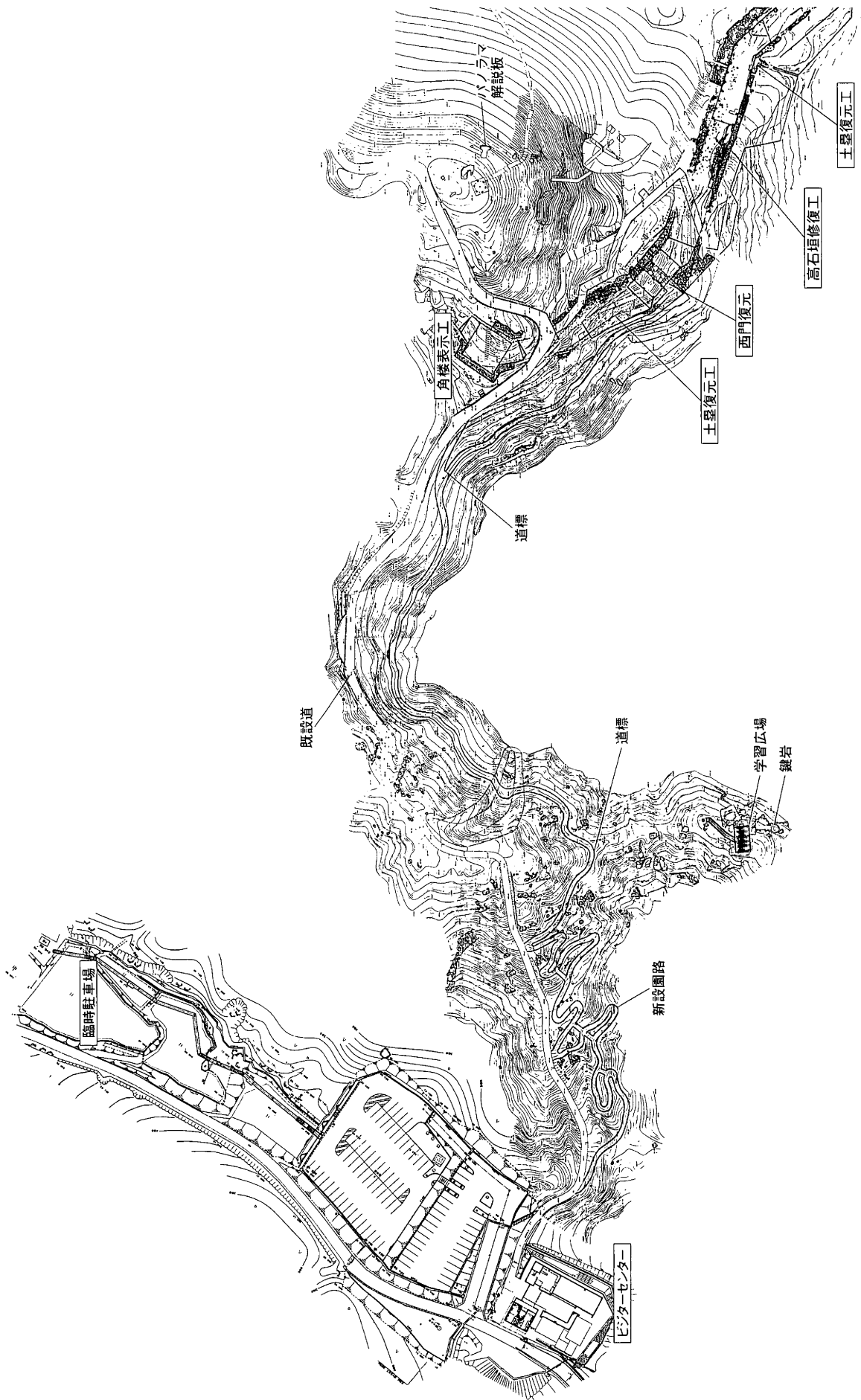
展示工事では地形模型（1/1,000）展示台・西門模型2基（1/20）・土塁剥ぎ取りを作成した。解説は映像とパネルで行い、パネル作成は平成17年度で実施することとした。西門模型は西門復元にあたり整備委員会で議論された内容を反映して、屋根の有無に違いのある2基を作成した。映像解説は「鬼ノ城の概要」・「古代山城」・「西門復元」・「版築復元」を作成し、任意に選択して観ることができる。

(6) その他

現在の鬼城山駐車場は来訪者が集中する時期には満車となるため、新たに臨時駐車場を設置した。

平成16年度（2004）年度事業経過

平成16年 6月3日（木）	第21回鬼城山整備委員会
6月16日（水）	補助金交付決定通知（16庁財第102号） 補助対象経費 222,400,000円
7月8日（木）	鬼城山環境整備工事契約
7月27日（火）	土塁崩落土撤去工事契約
8月11日（水）	第22回鬼城山整備委員会
11月10日（水）	地質調査業務契約
11月16日（火）	ガイダンス施設建設契約
11月18日（木）	第23回鬼城山整備委員会
12月24日（金）	鬼城山環境整備第2工区工事契約 （土塁復元・園路整備）
平成17年 3月22日（火）	総社市・山手村・清音村合併
3月25日（金）	鬼城山環境整備工事竣工
3月30日（水）	ガイダンス施設竣工
3月31日（木）	地質調査業務完了



アミ点部分が事業範囲

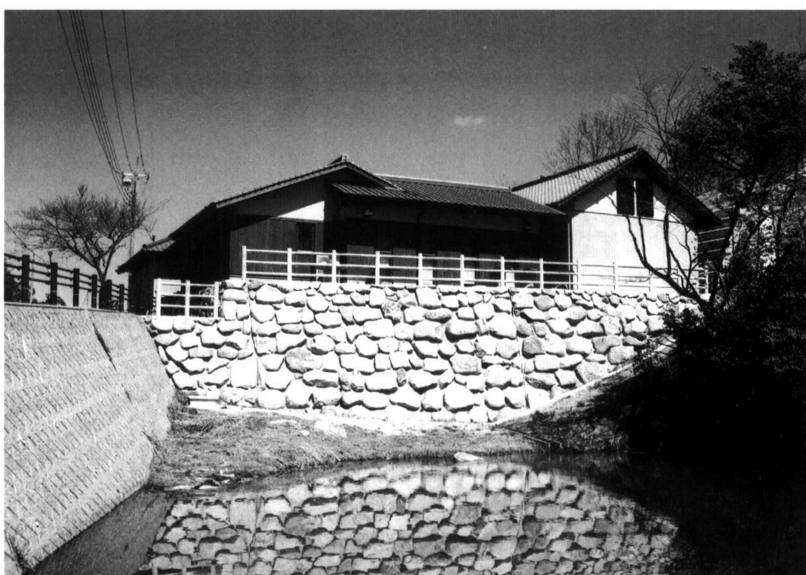
第58図 鬼城山環境整備地区図 (S=1/2,000)



第29図版
西門・角楼間の土塁と園路



第30図版
角楼表示（床と版築土塁）



第31図版
ガイダンス施設

5. 付 載

新山寺関連の出土遺物について

所在地 総社市黒尾

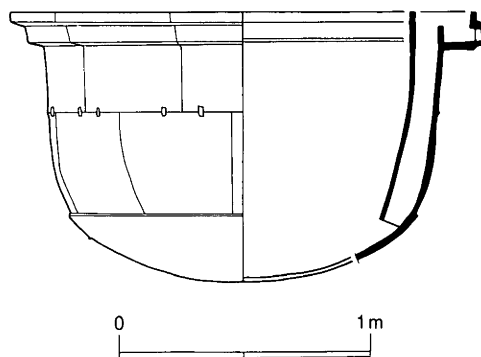
表採日 平成3年5月8日, 平成16年1月13日

新山寺は平安時代から戦国時代にかけて殷賑をきわめ、広大な活動領域をほこる山岳寺院である。山上には岩屋寺（蛇嶽）、鬼ノ城、新山寺と南麓の嶽寺が存在し、『備中誌』には新山十四坊、嶽寺八坊と蛇嶽十六坊をあわせて三十八坊が存在したと伝えている（註1）。

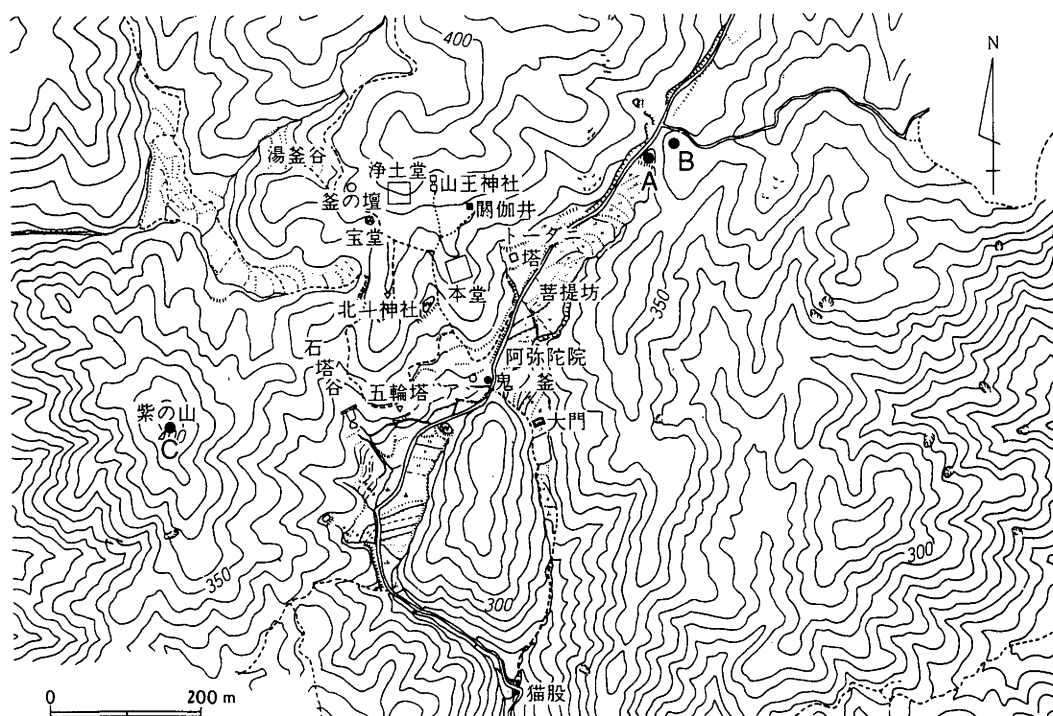
新山寺は平安時代より数々の文献に記され、『成尋阿闍梨母集』では成尋が延久3年（1071）10月20日に渡宋のため入山して修行に入り、『拾遺往生伝』には近江国蒲生郡出身の定秀上人が12年間新山に居住して仏道に励み、承保3年（1076）に往生をとげている。その後、造東大寺料国となった備前国に俊乗坊重源が赴任した際、備中別所（新山寺）にも関与したとされ、浄土堂を修理復興して一丈六尺の阿弥陀像を安置したのが12世紀末から13世紀初頃と考えられている（註2）。

現在、新山集落の一角には通称「鬼の釜」と称する鑄鉄製の釜が安置されているが、もともと湯釜谷に2体存在したもののうち1体が残ったと伝えられている。この「鬼の釜」こそ重源が衆生施浴のため湯屋を造り、そこに湯釜を設置した鑄造遺物である（註3）。

鬼ノ城の発掘調査においても、新山寺関連遺物として内面黒色土器や土師器碗・坏、そして早鳥式土器なども出土しており、量的には少ないながらも10世紀から14世紀初頭までの遺物が出土している。なかでも13世紀代の遺物が多く認められ、後続する遺物が激減することからみて、山間部における活発な宗教活動の一端を反映して



第60図 鬼の釜実測図（S=1/30 註3より）



第59図 新山廃寺遺構配置図（S=1/10,000）

いるのであろう。しかし、新山寺関連の遺跡は広大な山林に没して不明な点が多く、僧坊の名を表す字名や地元での伝承を頼りに全体を把握するには至っていない。そこで、今回は山岳寺院の実態に近づく基礎資料として、表採遺物を中心に紹介することにしたい。

1～9は平成3年5月に村上幸雄氏によってA地点の溜池縁辺部から表採されたもので、かつての池の浚渫時に大量の土器が出土したと伝えられている場所である。池の北側には鬼城山ビジターセンターが建設されているが、当該地は鬼城山から犬墓山に連なる分水嶺であり、黒尾地区と奥坂地区を分ける境界線ともなっている。

1～7は早島式土器で1～4が碗、5～7は皿である。8は備前焼碗で、9は瓦質の摺鉢である。年代観としては1～4の碗が小形化し、器高も低くなる器形であることを勘案すれば、概ね13世紀末から14世紀初め頃と考えられる。

10は鬼城山ビジターセンターの東側にあたるB地点の尾根頂部で表採したものである。頂部には僧坊跡と考えられる石を配列した遺構が残存しているが、後世の削平を受けて60cm程度の段が認められ、その崖面から表採した。地元の話によれば尾根頂部から西側斜面は、昭和初期の砂防工事の際、斜面を削りながら砂防段を形成したとされ、その際、土器類が数多く出土したと伝えられている。

10は亀山焼甕で外面は格子目叩き、内面はナデで仕上げられ、13世紀後半～14世紀初頭に比定される。11は平成16年1月にC地点の紫の山で散策者が表採したもので、『備中集成志』（註4）によれば「紫之辻二寺十軒」とあり、現地には古くから礎石や瓦の散布が認知されている。11は丸瓦で凸面は粗い縄目叩き、凹面は布目圧痕が認められる。

以上、簡略な資料紹介に留まったが、今後も継続して観察していきたい。 (松尾洋平)

註1 『備中誌』p1594, 日本文教出版株式会社, 明治36年

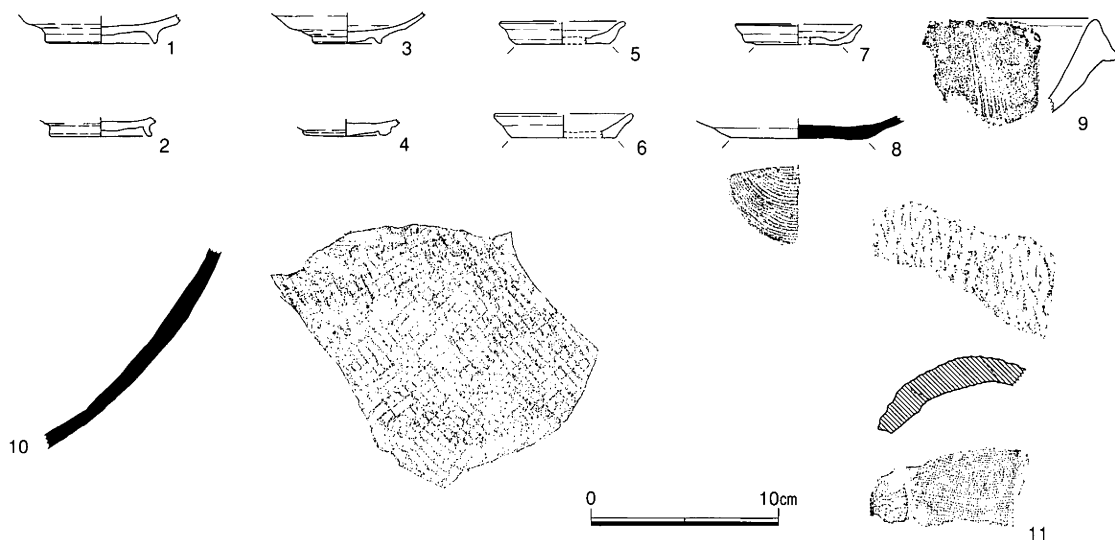
2 『総社市史』通史編, 総社市, 平成10年3月

3 鬼の釜の実測図は、五十川伸矢「中世前半の大型鉄製物」『第Ⅱ部京都大学埋蔵文化財研究センター紀要』Ⅷ 1990年から転載, 再トレースした。

4 『備中集成志』p203, 吉田書院, 昭和18年

参考文献

第3回山陰中世土器検討会資料集『中世須恵器の生産と流通』山陰中世土器検討会, 2003年



第61図 出土遺物 (S=1/4)

経山城の台風被害について

所在地 総社市黒尾895

調査期間 平成16年12月20～23日

調査概要

平成16年は台風の上陸が10個を数える記録的な「台風ラッシュ」に見舞われ、岡山県にも甚大な被害をもたらした。被害は瀬戸内海沿岸部の床上浸水や土砂災害、山間部に膨大な数の風倒木を残し、県内の文化財にも及んだ事は周知のとおりである。

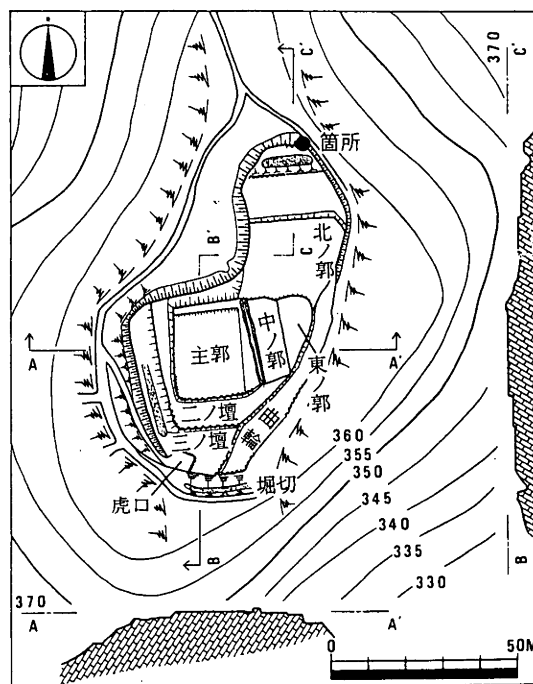
台風23号（10月23日）が通過した数日後、「北の吉備路」を散策された市民から市内黒尾に所在する経山城にも損傷を受けている旨の通報を受けた。早速、文化課職員により被害状況を確認したところ、次のような状況を確認した。

1. 北の郭北端に構築された石垣の北東部に位置する隅角部が崩落し、築石の背面にはむき出しになった裏込石が露出していた。
2. 崩落した築石は、石垣から北東方向の谷部へ転落し、遠いもので約25mも落下していた。
3. 城内には雑木を中心に風倒木が30本程度認められた。特に北の郭の空堀近くでは大木のヒノキが倒れ、持ち上がった根により地下の遺構を一部損壊していた。
4. 台風被害とは関係ないが、北の郭から主郭そして虎口に至るまで猪による掘り返しがあり、中の郭に見られる石列や主郭の石垣を一部損傷していた。

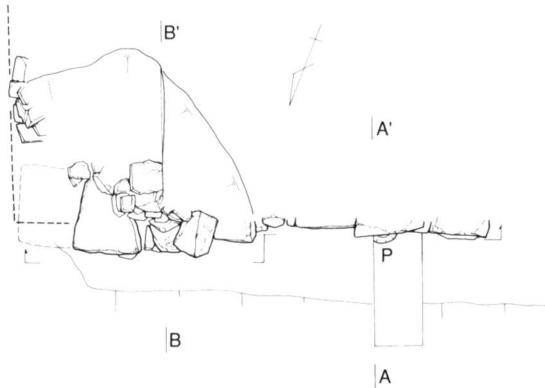
これらの中でも重大な被害を被ったのは石垣であり、崩落範囲は幅約2m、高さ0.7mである。築石を失った裏込層は、オーバーハングしながら不安定な形状をかりうじて維持し、放置すれば裏込石の崩落や残存している石垣自体も落下する恐れがあるため、記録を録りながら裏込層の法面を切り、処分した風倒木を利用して、しがらを組むなど応急的な保護処置を施すことにした。また、谷部へ落



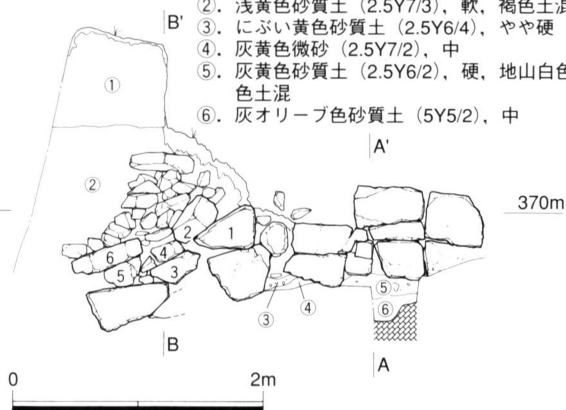
第62図 経山城位置図 (S=1/50,000)



第63図 経山城要図 (S=1/2,000) (註1)



- ①. 浅黄橙色砂質土 (7.5YR8/6), 軟, 盛土
- ②. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3), 軟, 褐色土混, 盛土
- ③. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4), やや硬
- ④. 灰黄色微砂 (2.5Y7/2), 中
- ⑤. 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2), 硬, 地山白色粒, 褐色土混
- ⑥. 灰オリーブ色砂質土 (5Y5/2), 中



第64図 石垣崩壊箇所 平・立面図 (S=1/60)



1. 崩壊前の石垣



2. 崩壊後の石垣

第32図版 石垣の被害状況

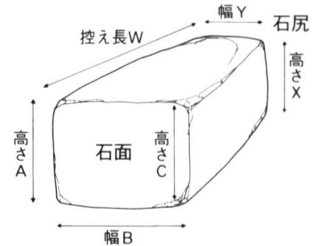
表 経山城石垣, 築石計測表

単位: cm

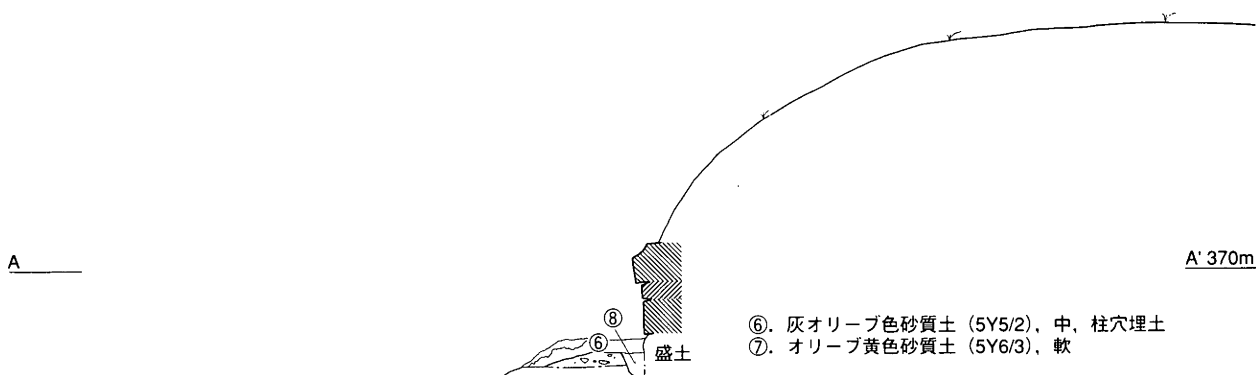
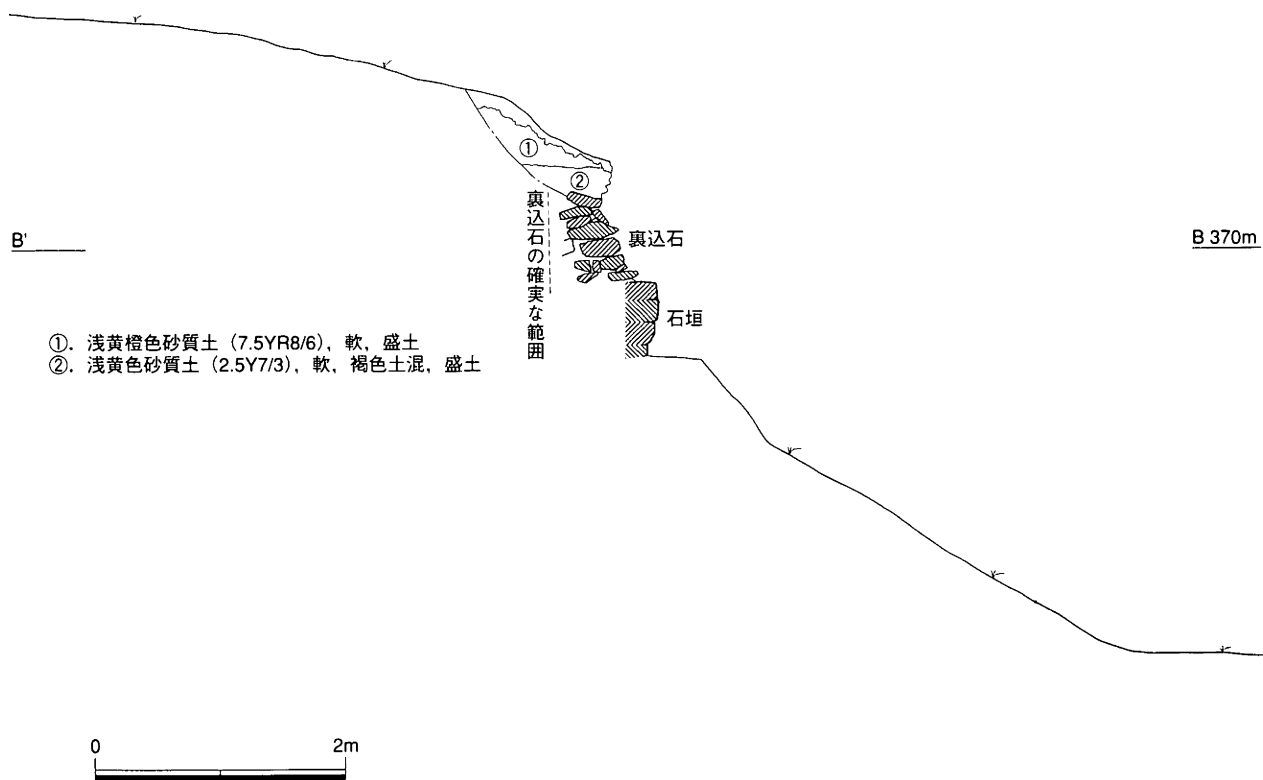
No.	石面			控え長 W	石尻		材質	加工	その他						
	高さA	幅B	高さC		高さX	幅Y									
1	15	48	30				カ	無							
2	13	58	22	33	20	45	カ	無	半分割れ						
3	20	40	15				カ	無							
4	12	24	10				カ	無							
5	17	30	14				カ	無							
6	15	57	15				カ	無							
7	25	35	26	48	30	35	ア	無	隅角・根石						
8	北19	東北48	東北46	北19	東北55	東北53	北25	東北22	東北20	東北25	ア	無	隅角		
9	18	12	37	66	18	18	68	32	12	17	28	72	カ	無	隅角
10	15	18	58	46	15	17	42	55	22	19	47	44	カ	無	隅角
11	11	17	33	62	11	17	60	38	17	17	5	45	カ	無	隅角
12	23	23	80	45	23	20	40	65	20	20	60	22	カ	無	隅角
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	17	46	26	26	32	42	ア	無							
15	12	35	7	33	10	23	カ	無							
16	18	38	22	32	19	30	カ	無							
17	25	現状60	復元80	30	35	36	カ	無							
18	16	59	12	30	12	50	カ	無							
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
20	15	26	18	26	20	2	カ	無							
21	25	30	22	42	22	34	カ	無	新規						

材質のカは花崗岩, アはアブライト。

No.7~21は転落石を示す。



第65図 築石計測位置図

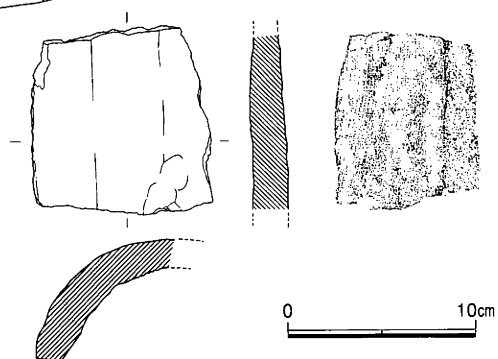


第66図 北の郭土塁断面図 (S=1/60)

下した築石については人力にてほぼ全てを引き上げ、積み直しに備える事にした。

現地作業は12月20日から23日までの3日間を要し、石垣の復旧作業と平行して崩落原因などを観察する事にした。

北の郭はコ字形に突出し、正面と両側面に石垣が築かれ上面には空堀が認められる。石垣は北面から東面へほぼ直角に構築されているものの、急斜面となる北西側の石垣はすでに崩落し、北面の法尻にも転石が点在することから、かなり崩壊が進行していると予想される。



第67図 虎口付近表採丸瓦 (S=1/4)

今回作業を実施した北東側の隅角部を保護するにあたり、まず根石の位置を確認し、石垣の連続を確かめることにした。

隅角部に残存している石垣は全体的にズレを生じており、互いの築石に隙間が広がっていた。そして石垣直下にサブトレンチを入れ、石垣の下部と地山の関係を確認したところ、表土下10cmから平坦に削平された地山と、根石との際にピットを検出した。犬走り状の平坦面は幅80cmを測り、これより以下の地山は未調査であるが、現況で高さ2.36mの法面となっており切岸の可能性がある。地山上には強固に締め固められたオリーブ黄色砂質土が造成されており、この上面に根石が配置されていた。

これらを含めた北の郭の北面は尾根稜線を切って切岸とし、その上部に石垣を築いたと考えられ、規模は石垣の根石から土塁頂部までの高さが約2.7mあり、全高は約5mを測る。問題は石垣の天端の位置であるが、隅角部では高さ約1.5mの石垣が残存していたとみられ、これ以上の高さを復元することは現段階では困難である。そのため2通りの考えを示しておきたい。

1. 石垣の天端が土塁の頂部まで構築された場合、①層に裏込石がほとんどなく盛土で構成されるため小規模な築石を使用した可能性がある。
2. 石垣の天端が土塁の中途までしかない場合、下部に石垣を構築し、上部を盛土で構成されたことが考えられる。その理由として、現存する石垣の築石に控えがないうことと、裏込石が少ないこと、そして石垣の勾配がほぼ直角に近いことが挙げられ、3m近い石垣を築くには困難を伴う。

石垣の裏込石は石面から75cmあたりまで見られさほど裏込石を充填しておらず、大きく2層に分層できた。②層は石尻から80cm近くまでの裏込石を確認したが、完掘には至らずさらに幅員が広がる可能性がある。①層は全く裏込石が認められず軟質の盛土であった。

周辺地形からみても地山は、東側へ徐々に降下すると見られ、隅角部の直下が安定した地山上に乗っているとは言えない。そのため、崩落した石垣は全体的に10～15cm孕みだし、約20°傾斜していることから、すでに崩落の前兆にあったものと推察される。こうした悪条件に拍車をかけたのは、石垣の間に生えていた種々の雑木であり、台風の突発的な強風にあおられて崩壊を早めたものと判断した。

経山城は平成11年度に市指定文化財に指定されてから、地形測量などの基礎的調査が未実施である。永く郷土の文化財を継承し保護する観点からは、今回の石垣のように全体に対する遺構の位置付けが不十分であることや、遺跡の評価が進展するよう早急に対応を練るべきと思われる。 (松尾)

註1『日本城郭大系』第13巻、新人物往来社、S55より引用一部改変。



第33図版 石垣検出状況（北から）



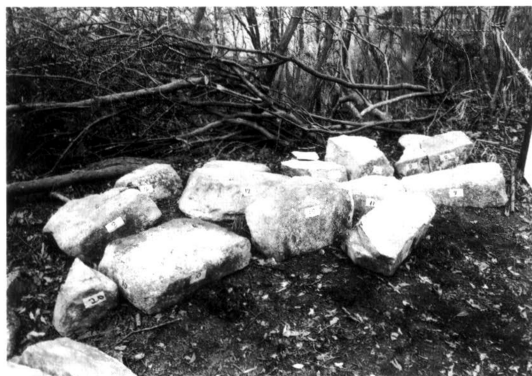
第37図版 石垣と裏込石（西から）



第34図版 築石転落状況



第38図版 築石の引上げ作業



第35図版 築石の仮置き状況



第39図版 遺構の保護処置



第36図版 裏込石

中田啓司氏寄贈の瓦

三輪山の南裾、百射山神社の南東に位置する下三輪集落の個人住宅に改築の計画がなされた。改築に伴って、駐車場への出入りに障害となっていた電信柱を宅地の北端に移築することになり、中田啓司氏から、以前電信柱を立てる際に古代の瓦が出土したとの連絡を受け、立会調査に赴いた。

電信柱を抜き取った痕はすべて電信柱埋設時の埋め土で、土層を観察することはできなかった。また、新たな埋設坑掘削箇所も後世の攪乱を受けており、近世以降の瓦が数点出土したのみであった。

なお、立会調査時に中田啓司氏より、電信柱埋設坑から出土した瓦と、当該地から東へ100mの地点（第 図A地点）で採集された軒平瓦を実見させていただいた。その際これらの貴重な資料を、市教育委員会に寄贈して下さるとともに様々なご教示を得た。記して感謝の意を表します。

寄贈された瓦のうち、1はA地点から採集された須恵質の軒平瓦である。現在までに採集された瓦の中では唯一の軒平瓦である。瓦当面には細い凸線で描かれた均整唐草文が施されており、中心飾を含む約2/3を欠く。凹面や側面の一部に部分的に自然釉が付着している。凸面は撫で消されているが、縄目と思われる叩き目が一部に認められる。

2～11は、電信柱埋設坑（第 図B地点）掘削の際に出土したものである。2～9は平瓦で、3の両面と、4の凹面が荒れて調整が不明である他は、すべて凹面には布目、凸面には縄目の叩き目が認められる。10、11は丸瓦である、10は、凸面が荒れているが、比較的細かな縄目の叩き目がみられ、凹面には布目が残存部全面に認められる。11は、近世以降と考えられる燻し瓦である。凸面は磨り消し仕上げ、凹面には布目がみられる。

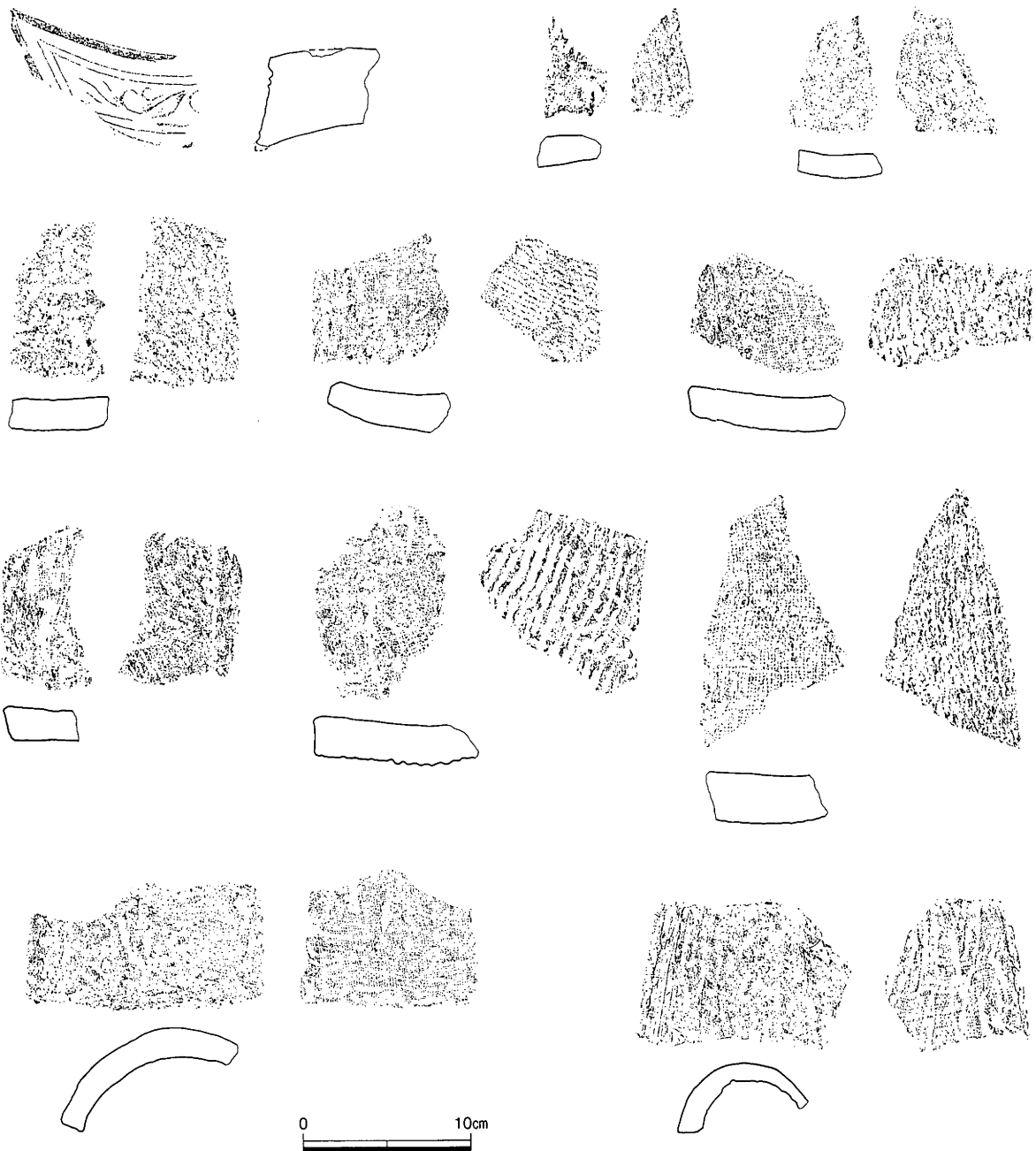
かつてこの地では、葛原克人・中田啓司の両氏によって古代の瓦が採集されており、また百射山神社の西側、山裾切断面上部には、基壇と思しき版築状の土層が認められることなどから、寺院が建立



第68図 瓦採集地位位置図 (S=1/8,000)

されていた可能性が指摘され、窪屋郡美和郷に位置することから三輪廃寺跡とされてきた^註。1754年（宝暦4）に記された『備中集成志』の「屍ヲ埋ム處ニ墓誌ヲ建。大友之臣是ヲ護ル。後塔ヲ建。今此處空地也。寺之跡ト云在家在」や、1853（嘉永6）年頃の編纂と考えられる『備中誌』の「天神社往古は別當寺有りて天神坊といへり」など、百射山神社に関する記載の中にも寺の存在を伝える記述がみられる。しかしながら、版築状土層の上面は、現状では平坦面が狭く、神社周辺にも伽藍が配置できそうな空間は認められない。また小字名に寺の存在を彷彿させるようなものも皆無であるため塔のみが建立されていた可能性も考えられる。今後も中田啓司氏のご教示を仰ぎながら踏査を重ね、資料の蓄積をはかっていきたい。（平井）

註 葛原克人1987「三輪廃寺」『総社市史 考古資料編』



第69図 瓦実測図 (S=1/4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぼう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	15
編著者名	谷山雅彦, 平井典子, 武田恭彰, 前角和夫, 高橋進一, 松尾洋平
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央1-1-1 TEL 0866-92-8363
発行年月日	西暦2006年3月31日

総社市埋蔵文化財調査年報 15

2006年3月31日 印刷

2006年3月31日 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

